

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Environmental Exploitation on the Eastern Slope of the Southern Central Andes : A Case Study of the Agrico Pastoral Society of Marcapata, Cuzco, Peru

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 紀夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004533

中央アンデス南部高地の環境利用

—— ペルー，クスコ県マルカパタの事例より ——

山 本 紀 夫*

Environmental Exploitation on the Eastern Slope of the Southern
Central Andes: A Case Study of the Agrico-Pastoral
Society of Marcapata, Cuzco, Peru.

Norio YAMAMOTO

Since the publication of the ethnohistorical studies of Murra [1968, 1972] on the nature of environmental exploitation among Central Andean populations, “vertical control” or the “model of verticality” has been a major theme in Andean ecological and economic anthropology. Subsequently several contemporary studies of “vertical control” have appeared. Three types of “vertical control” have been analyzed by Brush [1977] and four by Onuki [1978a].

This article examines “vertical control” both from technological and from socio-cultural perspectives, using data obtained during field research carried out in Marcapata district, Quispicanchis province, department of Cuzco, Peru. Field work was conducted for some six months in 1978–1979.

The district of Marcapata is divided administratively and socio-culturally into four agrico-pastoral communities. All the communities are situated on the eastern slope of the Andes and each contains various ecological zones, ranging in a short distance from sub-tropical rainforest to the nival, through the *ceja* vegetation zone. These different ecological zones are exploited and managed by members of each community and economic self-sufficiency is achieved on the community level.

In this article the socio-cultural characteristics of the four communities of Marcapata and the different ecological zones, in relation to the exploitation of natural resources, are first outlined. Next the relationship between ecological zonation and native

* 国立民族学博物館第3研究部

concepts of the various habitats is discussed. The agrico-pastoral systems, including maize and potato farming, practiced in the different ecological zones, are analyzed. Since economic self-sufficiency is not always achieved on the household level, the discussion focuses on mechanisms of interzonal exchange and reciprocity. Finally, the characteristics of the patterns of environmental exploitation found in Marcapata are compared with other types of "vertical control", and problems in need of further study are specified.

I. はじめに	1) 環境区分
1. 中央アンデスとバーティカル・コントロール	2) 栽培植物
2. 調査方法、地域および期間	2. 耕地の型と分布
II. マルカパタの自然環境	3. 農耕技術
1. 地形	1) 農作業暦
2. 気候と植生	2) トウモロコシの栽培
III. マルカパタの概況	3) パレイシヨ耕地のローテーション
1. マルカパタの歴史	4) パレイシヨの栽培
2. コムニダと集落	4. 家畜飼養と交換
3. ミスティとインディオ	1) マルカパタの家畜
IV. 環境利用	2) 牧畜と交換
1. 環境区分と栽培植物	V. 中央アンデス南部高地の環境利用 ——むすびにかえて

I. はじめに

1. 中央アンデスとバーティカル・コントロール

本稿は、中央アンデス南部高地において、農業と牧畜をおもな生業とする一地域社会の環境利用の実態を、とくに高度差利用の面からあきらかにすることを目的としている。アンデス山脈は、南アメリカ大陸の太平洋岸にそって南北に走る、世界最長の大山脈であるが、とくにペルー南部からボリビア北部にかけての中央アンデス地帯は、この山脈のなかでも、もっとも大きい高度と幅を有する部分となっている(図1)。

そこでは、アンデス山脈は平行する、いくつもの支脈にわかれ、東側の支脈には海拔6,000メートル前後の氷雪におおわれた高峰が、西側の支脈には乾燥と高度のために地肌をむきだしにした海拔5,000メートル前後の山々がつらなっている。その中央部には、海拔3,000メートルから4,000メートルに達する広大な高原がひろがっている。

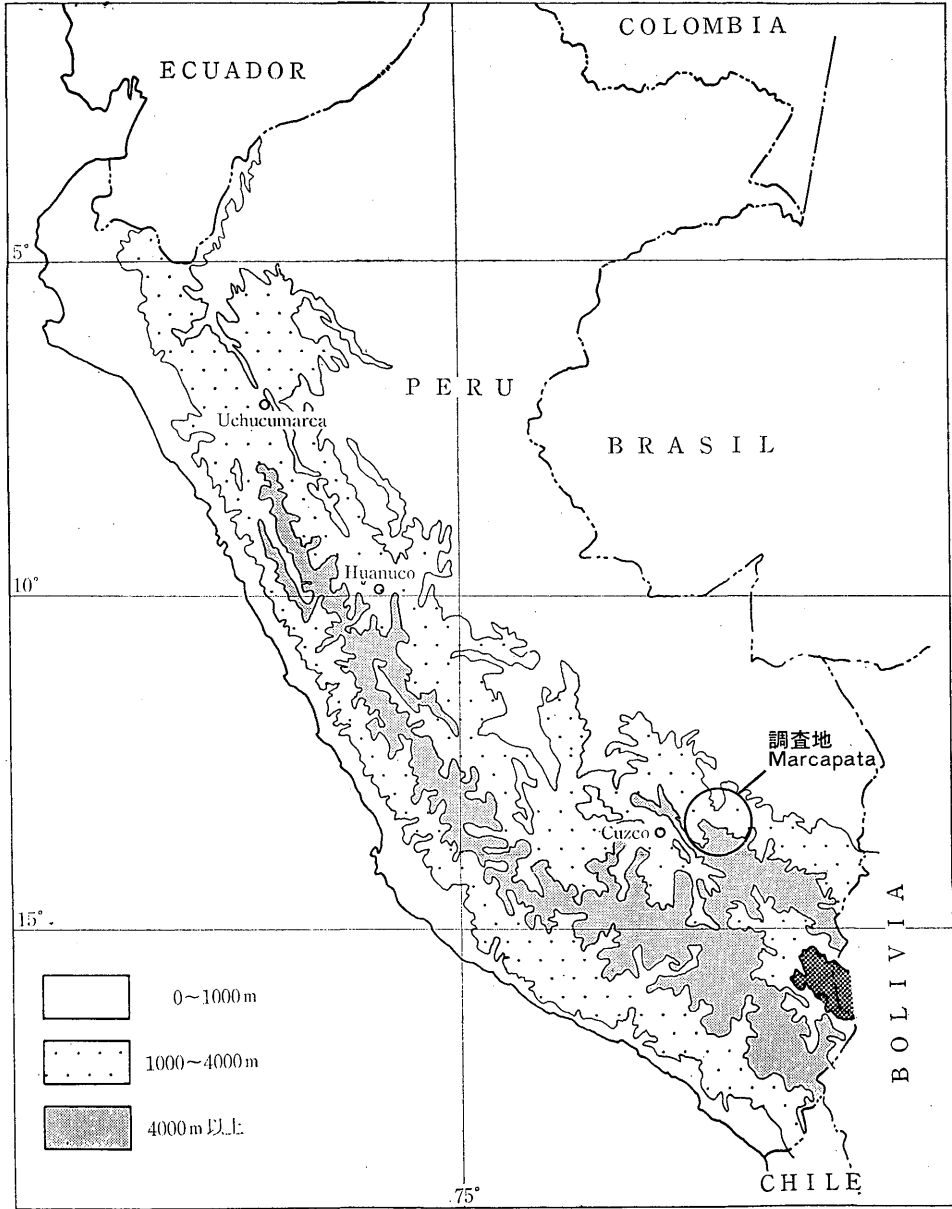


図1 中央アンデス概念図

この中央アンデスの高地こそ、海岸地帯とともに、古くから南アメリカの高文化が栄えたところであり、また現在もなおその伝統的色彩を色濃く残した地域となっている。一般に、中央アンデスは、アンデス山脈を中心として、3つの地域にわけられ、そ

れぞれコスタ (costa), シエラ (sierra), モンターニャ (montaña) とよばれている。コスタはアンデス山脈西側の海岸地域で、ここはアンデス山脈からながれおちる河川によってつくられるオアシスのほかは、大部分が砂漠となっている。シエラは、アンデス山岳地域のことで、寒冷高地帯である。モンターニャは、アンデス山脈の東側のアマゾン川源流域をふくむ熱帯低地である。

しかし、じっさいの中央アンデスの自然環境ははるかに多様で、きわめて限られた地域のなかに、さまざまな環境がみられる¹⁾。これは、中央アンデスが緯度的には熱帯ないしは亜熱帯圏に位置しながら、そこに6,000メートルという大きい高度差が存在するからである。本来なら熱帯地方特有の自然条件を示すはずのところ、この高度差のために多様な自然環境がみだされるのである。このような中央アンデスの自然条件がまた、中央アンデスにおける人間の生活領域を高度域の点でもきわめて幅広いものとしている。すなわち、アンデスにおける人間の生活領域は太平洋岸やアマゾン源流域などの低地部から氷雪地帯にちかい海拔5,000メートルの高地に至るのである。

さて、このような特徴をもつ中央アンデスの環境の利用にかんする研究が、最近アンデス研究者のあいだでひろく関心をおつめている。それは、Murraの研究[MURRA 1968, 1972]が大きな刺激になった。Murraは、エスノヒストリーの研究から、スペイン人侵入当時のアンデス高地のくらしとは幅広い高度差のなかにみられるさまざまな環境を最大限に利用して、あたえられた環境内での自給自足に努めていたことをあきらかにした。このような環境利用の形態をMurraはパーティカル・コントロール (vertical control) とよび、すくなくともインカ時代にはアンデス各地に存在し、しかもそれは「垂直列島 (vertical archipelago)」の形をとると述べたのである²⁾。

その後の研究で、パーティカル・コントロールによる環境利用の原則は現代の中央アンデス農牧社会にも存続していることが指摘された。たとえば、Websterは南高地クスコ県のケーロ (Qero) で、Brushは北高地のウチュクマルカ (Uchucumarca) で、FonsecaとMayerは中部高地のワヌコ (Huánuco) にちかいチャウピワランガ (Chaupiwaringa) でのパーティカル・コントロールの現代の事例を報告している [WEBSTER 1971; BRUSH 1974, 1977; MAYER 1971; FONSECA 1972]。

さらに、Brushは、これらの事例の比較研究によって、アンデス高地の環境利用の

1) たとえば、Ellenbergは中央アンデスの海拔2,000メートル以上のところで16の ecoregion をみとめている [ELLENBERG 1979: 401-416]。

2) 「パーティカル・コントロール」は大貫によって「垂直統御」として紹介されている [大貫 1978a: 713-716]。

類型化を試み、それにはすくなくとも圧縮型、列島型、拡散型の3つの類型があると述べ、また大貫はこれらの類型に專業型の追加を提唱している [BRUSH 1977; 大貫 1978a]。これらの類型の詳細については後述するが、とにかくアンデス高地における環境利用の研究は Murra のパーティカル・コントロール論を契機として注目されるようになり、現在その類型化が論じられるまでに至っているのである。

しかしながら、このような環境利用をめぐる研究のなかに問題がないわけではない。上述の類型論にかぎってみても、類型化をおこなうに際しての基準が必ずしも明確ではないこと、類型の形態のみが重視されるきらいがあること、さらにアンデスの環境利用の特色を把握するためには、これまで報告されている事例ではきわめて不十分であることなどが指摘できる。

そこで、本稿では中央アンデス南部高地における一地域社会の環境利用についての観察調査結果をできるだけくわしく報告することにした。アンデス高地の環境利用の特色をあきらかにするためには、何よりもその具体的な事例をふやすことが要求されているとかんがえられるからである。

2. 調査方法、地域および期間

従来の環境利用の研究ではパーティカル・コントロールをおこなっている単位が世帯であるのか、集落であるのか、さらにはコミュニティなどのような地域社会であるのか、その点が必ずしも明確ではなかった。それは、調査がせいぜい一つの村を対象としていたということと関係がありそうである。そのため、本調査では、できるだけ幅広い、あるまとまりをもった地域社会を調査対象とした。

調査対象とした地域は、ペルー南部高地のクスコ県 (Departamento de Cuzco)、キスピカンチス郡 (Provincia de Quispicanchis)、マルカパタ地区 (Distrito de Marcapata) である。クスコ市 (Ciudad de Cuzco) は、いうまでもなくかつてのインカ帝国の中心地であったところであり、マルカパタ地区はこのクスコ市から直線距離で東に約100キロメートルほどのところに位置しており、約6,000人のその住民の大半が農業および牧畜を生業にしている。

調査は、マルカパタ地区の中心地、マルカパタ村 (Pueblo Marcapata: プエブロ・マルカパタ) を基地として、1978年11月から1979年3月までと1979年8月から同10月までの2回にわたっておこなった。以下、本稿ではとくにことわらないかぎりマルカパタ地区をマルカパタ、その中心地、マルカパタ村をプエブロ・マルカパタとして記述してゆくことにする。2回の調査のうち、前者は昭和53年度文部省科学研究費によ

る海外調査「中央アンデス農牧社会の民族学的研究——海岸，高地，熱帯低地地域間の動態的社会関係」（研究代表者増田昭三東京大学教授）の一環としておこなったものである。

この共同研究では、マルカパタの調査は佐藤信行広島大学教授と筆者が担当し、佐藤が主としてプエブロ・マルカパタの親族組織と社会構造の調査、筆者は環境とその利用の調査を分担した³⁾。環境の調査では高度の異なる5地点で植生調査を実施したほか、地形や植生の一般観察もおこなった。また、栽培植物も腊葉標本を作成、トウモロコシとバレイショは生標本を採集した。これらの標本の同定は、栽培植物の大半は筆者が、一般植物は César Vargas 前クスコ大学教授(植物学)がおこなった。また、バレイショの同定は神戸大学農学部松林元一教授とリマ(Lima)の Centro Internacional de las Papas (国際バレイショ研究センター)に依頼した。

気象データについては、前記プエブロ・マルカパタの保健所に自記温度計を設置したほか、湿度についても可能なかぎり測定するようにつとめた。地図作成にかんしては、クリノコンパスと50メートル巻尺による簡易測量を実施し、集落などの標高はいずれもスイス Tomen 社製高度計(9,000メートル用)の表示によって決定した。

なお、上記植物標本のうち、腊葉標本およびトウモロコシの果穂の標本は国立民族学博物館で保管、バレイショは神戸大学農学部遺伝育種学研究室および上記国際バレイショ研究センターで栽培管理されている。

Ⅱ．マルカパタの自然環境

1. 地 形

マルカパタの領域は、海拔6,336メートルのアウサンガテ(Auzangate)山を主峰とするアウサンガテ山群のすぐ北側からアマゾン川の源流のひとつマルカパタ川上流の流域にひろがる地域である(図2)。その領域の南はアウサンガテ山群の氷雪地帯によってカンチス(Canchis)郡とへだてられている。その東西もこの山群の西端および東端部からはほぼ北にはりだす尾根によって、パウカルタンボ(Paucartambo)郡やキスピカンチス郡のオコンガテ(Ocongate)地区、さらにプーノ(Puno)県などと区切られている。

すなわち、マルカパタはアンデス東斜面のアウサンガテ山群に三方をかこまれた谷に位置している。その低地部はアマゾン源流のひとつ、イナンバリ(Inambari)川の

3) この共同研究全体の調査概要については本号増田論文を参照されたい。

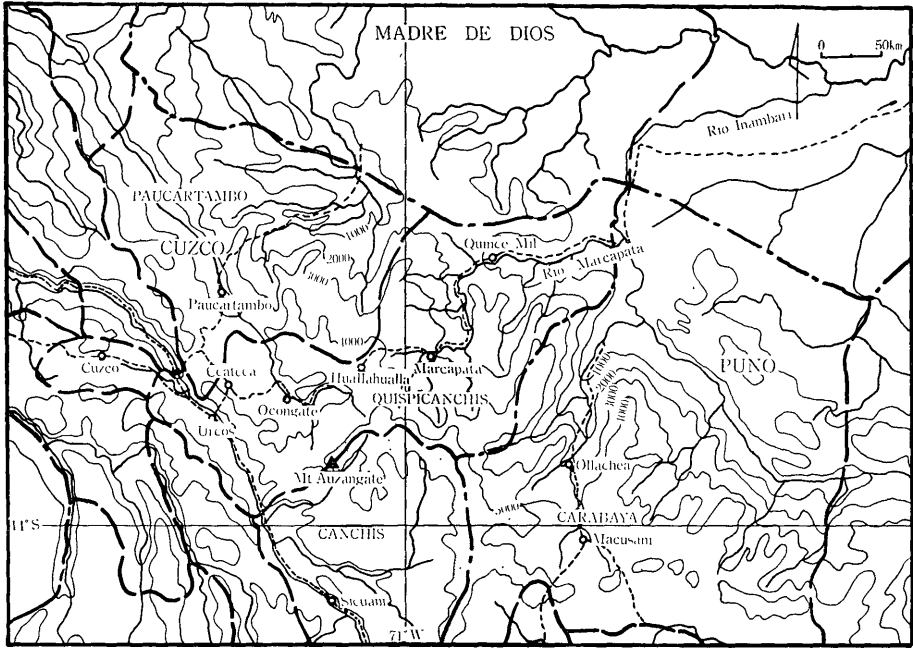


図2 調査地とその周辺部

一支流、マルカパタ川の中流地域までである。したがって、マルカパタはマルカパタ川の上・中流地域にひろがる地域で、面積が約2,000平方キロメートル、高度域は海拔約1,000メートルの低地から海拔5,000メートル以上の高地までがその範囲である。

このマルカパタ川は、海拔2,000メートルから3,000メートルあたりで4本の支流にわかれている。これらの支流は、いずれも河川の急流によって、山地が侵食されてできた急峻なV字谷を形成している（写真1）。またその谷は、標高4,000メートル以上のところでは、例外なく山腹が氷食されてできたU字谷となっている。集落は、ほとんどこれらの谷間や山腹斜面に位置しており、海拔1,000メートルくらいから4,400メートルの高度域に散在しているのである。これらの集落は地形的にはいずれもアンデス山脈の東側に位置しており、それが後述するようにマルカパタにおける環境利用の方法を特徴づけている。

しかし、マルカパタの集落のなかでワラコニ（Huaracani）村だけは地形的にも環境利用の方法のうえでも唯一の例外となっている。さきに述べたように、中央アンデスはいくつもの平行する支脈にわかれているが、それはペルー南部あたりで、東・西の平行山脈となる。その中央部は、一般にプーナ（puna）またはアルティプラノ（alti-

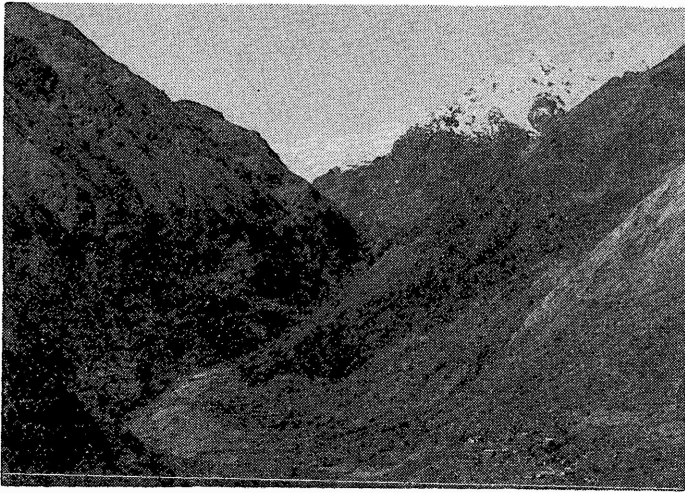


写真1 マルカパタ中・高地部の景観

plano) とよばれる海拔4,000メートル前後の広大な高原となっている。ワラコニ村はこの高原の東端部、東山脈のすぐ西側に位置しており、マルカパタの他の集落とは海拔5,000メートルにちかい峠によって通じている。

ところで、このような地形条件のために、マルカパタ内の交通手段はきわめて限られたものとなっている。唯一の自動車道路はクスコからウルコス (Urcos)、オコンガテ (Ocongate) を経てキンセ・ミル (Quince Mil) に至るものである。しかし、これさえも途中海拔4,600メートルあまりの峠をこえ、急な斜面につけられたものであるため、雨期ともなればしばしば通行不能となる。この幹線道路を除けばあとはすべて徒歩にたよらなければならない。しかも、谷がふかい、急峻なV字状であるため、この徒歩交通のための山道も、尾根をへだてた、ふたつの谷の間をむすぶものはほとんど発達しておらず、ひとつの谷内での上下方向のみである。

したがって、これらの谷と谷の間を移動するためには、マルカパタ川との出会いまで谷を下って、そこからあらためて登るか、あるいは谷の源流部まで登り、そこから尾根をこえて、目的の谷を下るしか方法がない。いずれにしても、標高差で1,000メートルから2,000メートルの山道を徒歩で上下することになる。

2. 気候と植生

はじめに述べたように、中央アンデス地域はアンデス山脈の西側と東側とで対照的な景観を示し、太平洋岸は海岸砂漠地帯、アマゾン源流域は降雨林地帯となっている。

これは主として、大西洋側からふく湿気をふくむ貿易風がアンデス山脈によってほとんど遮断されるためである。したがって、アンデス東斜面に位置するマルカパタは全体的に雨の降りやすい地域といえるが、その領域が海拔約1,000メートルのアンデス山麓の低地部から山頂部の氷雪地帯までの幅広い高度差を有しているため、高度に応じて気候および植生には大きなちがいがみられる(図3および図4)。この地域の気象については、今回の調査では正確なデータが得られなかったが、キンセ・ミル、ハトハ(Ccatcca), オヤチェア(Ollachea)の3地点のデータから、幅広い高度差をもつマルカパタ地域のおおよその気象条件について知ることができる(表1)。

さて、キンセ・ミルはマルカパタの領域の最下部に近い海拔600メートルあまりの低地に位置しており、その年間降雨量は6,000ミリメートル以上に達し、平均気温は一年を通じて20°C以上、湿度も90パーセント前後で、高温、多湿、多雨な熱帯低地の特徴的な気候を示している。そのため、植生的には、このキンセ・ミル付近は典型

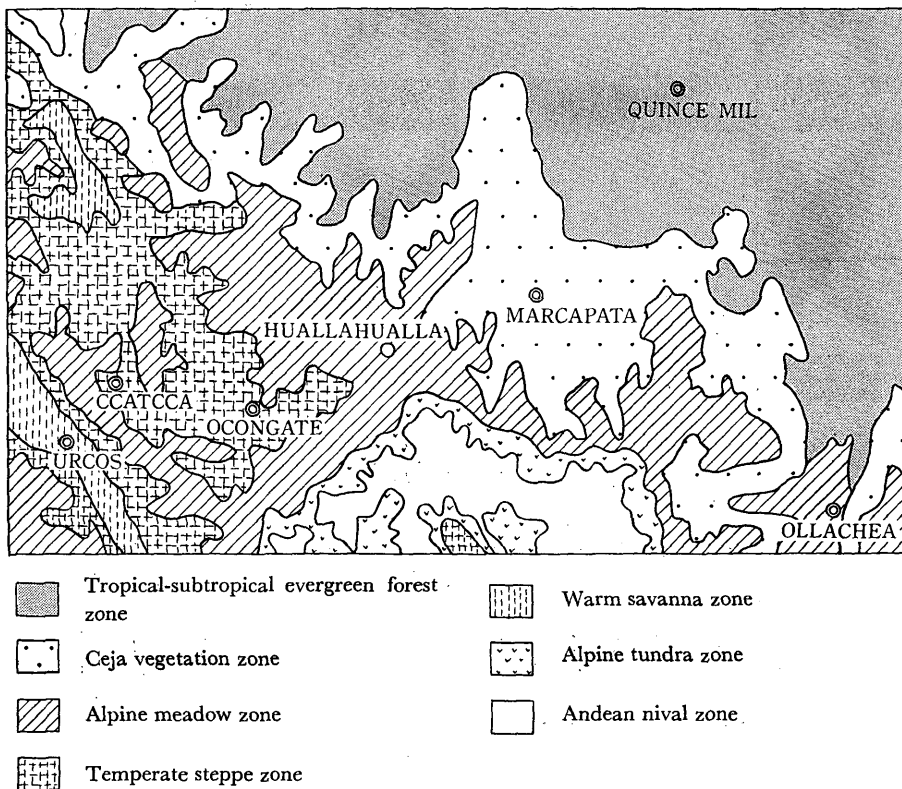


図3 マルカパタおよび周辺部の植生 (ONERN [1976] を簡易化した)

表1 ペル - 南部 3 地点の気象条件*

Quince Mil (Alt. 620 m)						Ollachea (Alt. 2,890 m)						Ccatcca (Alt. 3,726 m)					
月	平均 気温	最 高 気温	最 低 気温	雨 量 (mm)	湿度 (%)	月	平均 気温	最 高 気温	最 低 気温	雨 量 (mm)	湿度 (%)	月	平均 気温	最 高 気温	最 低 気温	雨 量 (mm)	湿度 (%)
1	23.0	28.1	19.6	835.3	91	1	12.6	17.5	8.7	231.2	86	1	9.5	14.3	3.9	104.1	75
2	22.8	27.7	19.7	740.8	90	2	12.6	17.5	8.8	193.2	87	2	9.4	14.1	4.1	127.4	78
3	23.1	28.2	19.5	656.8	90	3	12.5	17.7	8.5	163.4	87	3	9.3	14.5	3.4	95.1	77
4	22.7	28.1	19.1	451.4	89	4	12.5	18.1	7.9	96.7	86	4	9.4	15.7	2.1	44.1	74
5	22.1	27.1	18.6	330.4	89	5	12.0	18.2	6.7	18.4	84	5	8.6	15.6	-1.0	10.9	68
6	21.1	26.2	18.0	367.9	90	6	11.0	17.9	6.1	14.2	81	6	7.9	15.5	-2.8	2.2	62
7	20.7	25.8	17.0	325.2	90	7	11.2	17.9	5.5	13.5	82	7	7.2	15.1	-3.6	4.5	62
8	21.3	27.1	17.7	314.2	88	8	11.4	17.3	5.9	41.8	82	8	7.9	15.3	-1.3	12.8	65
9	22.7	28.7	18.3	329.8	86	9	12.0	18.2	6.7	41.5	81	9	8.7	15.6	1.2	19.4	65
10	22.0	28.6	19.1	606.6	88	10	12.4	18.3	7.7	76.2	84	10	9.9	16.1	2.9	31.7	65
11	23.2	28.5	19.3	549.6	88	11	12.6	18.2	8.2	81.3	84	11	10.4	16.3	3.3	46.7	68
12	22.9	27.8	19.6	901.2	90	12	12.5	17.5	8.5	164.6	85	12	9.8	15.0	4.0	92.6	72
平均 (計)	22.3	27.7	18.8	534.1 (6409.2)	89	平均 (計)	12.1	17.9	7.4	94.7 (1136)	84	平均 (計)	9.0	15.3	1.4	49.3 (591.5)	69

* Servicio Nacional de Meteorología e Hidrología の資料 [1964-1976] にもとづく。

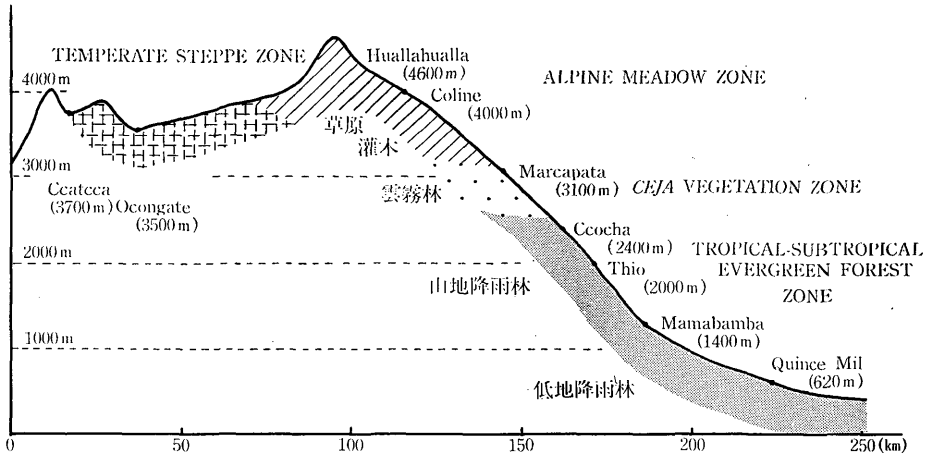


図4 高度による植生の変化とおもな集落
(英語による植生ゾーンは図3に対応する。日本語によるものは筆者の観察にもとづくものである)

的な熱帯ないしは亜熱帯降雨林地帯となっている。マルカパタの領域は、海拔約1,000メートルのサン・ペドロ (San Pedro) 村からはじまるが、このあたりも、樹高30メートルくらいに達する喬木が多く、まだ亜熱帯低地降雨林地帯的な景観を示している。

この森林は、高度をますにつれ、次第に構成樹種が変化し、樹高も低くなって、亜熱帯山地降雨林的な景観を示すようになる。それは海拔2,400メートルちかくまでつづき、海拔約2,400メートルの村、コチャ (Cocha) 周辺では、まだアマゾン源流域などの低地部に特徴的なウコギ科 (Araliaceae) の *Oreopanax* sp. や *Irespanax* sp. がみられる。

つぎに、オヤチュエアのデータを参考にプエブロ・マルカパタ付近の様子を概観してみる。オヤチュエはプエブロ・マルカパタ (海拔3,100メートル) とは尾根ひとつへだてた、やはりアンデス東斜面に位置している村で標高 (2,890メートル) もほぼ等しい。この表によれば、オヤチュエアではキンセ・ミルにくらべ、雨量は1/5ほどで、気温は約10度ひくく、月平均気温の年較差は小さく、年平均気温は11~12°Cである。また、雨量は5月から9月にかけての5カ月間は50ミリ以下の乾燥月がつづく。

筆者が得たプエブロ・マルカパタの気温のデータもほぼ同じ結果を示しており、日較差も10°C前後である⁴⁾。雨量についても、同じような傾向を示すものとみてよく、

4) プエブロ・マルカパタの保健所に設置した自記温度計によれば1978年11月から1979年3月までの同地の平均気温は13°Cから14°Cの範囲であった。しかし、これは室温であるため、じっさいの気温はこれより1~2°C低くなる可能性がある。また、日較差については、筆者が滞在した期間のうちでもっとも大きくなる8月から9月にかけての期間でも、最低気温が5~8°C、最高気温は14~21°Cで、最大の日較差は16°Cであった。

4月から9月ころまでが乾期 (chirau), 10月から翌年の3月ころまでが雨期 (poqoy) である, とされる。なかでも1月から3月まではもっともよく雨が降り, とくにこの時期はママポコイ (mamapoqoy) とよばれる。

これらの気象データのなかで, 湿度についてはプエブロ・マルカパタとは若干異なっているとおもわれる。オヤチュアの湿度は年間を通じて80パーセントを下ることがないが, プエブロ・マルカパタ付近はさらに湿度のたかい地域であるとおもわれる。筆者がプエブロ・マルカパタで得たデータによれば, 11月から3月にかけての雨期の湿度は95パーセントをほとんど下ることがなく⁵⁾, また乾期でもきわめて霧の発生しやすい, アンデス東斜面特有の雲霧層に位置しているからである。

このような特徴をもったプエブロ・マルカパタ付近の植生は, 一般にセーハ (ceja), もしくはセーハ・デ・モンターニャ (ceja de montaña) といわれる雲霧林を形成している。そこでは樹高10~15メートルくらいの木がかなり密生していて, その樹冠および幹がコケ類, 着生ラン, パイナップル科の植物などによっておおわれたモス・フォレスト的な森林を形成している。マルカパタでは, この雲霧林帯は海拔2,500~2,600メートルあたりからあらわれ, 3,000メートル前後で卓越し, 海拔3,200~3,300メートルあたりまでつづく。

ただし, この雲霧林帯あたりから谷の斜面を利用した大規模な階段耕地, アンデネス (andenes) があらわれてくるため, 現実の景観としては谷の南北両斜面できわだった対照を示す。すなわち, 南むきの斜面は典型的な雲霧林を形成しているが, 北むきの斜面は全面耕地として利用されているのである。この雲霧林が卓越している海拔3,100メートルの高度はマルカパタの中心地, プエブロ・マルカパタが位置しているところで, また主作物であるトウモロコシとバレイショ栽培ゾーンの境界となっている重要なところである。したがって, プエブロ・マルカパタ周辺部については, 以下にすこしくわしくみておきたい。

プエブロ・マルカパタは東にはりだす尾根上に位置しており, この尾根の両側にもやはり東西に走る大きな尾根がある。したがって, そこは, 南北両側にそれぞれ小さな谷をへだてて, 大きな斜面が迫っていることになる。そして, このふたつの斜面がまったく, 対照的な景観を示している (写真2)。図5はこれを具体的に示したもので, この図でアラス (Araz) 川をへだてて, あい対するふたつの斜面も景観的にはかなりちがっている。アラス川の右の斜面は, 先述した自動車道路が横切っており, こ

5) たとえば, この期間のうちではもっとも湿度が低いとかがえられる11月の日中でも測定した14日間のうちで90パーセント以下の日は1日だけで, しかもそれは89パーセントであった。

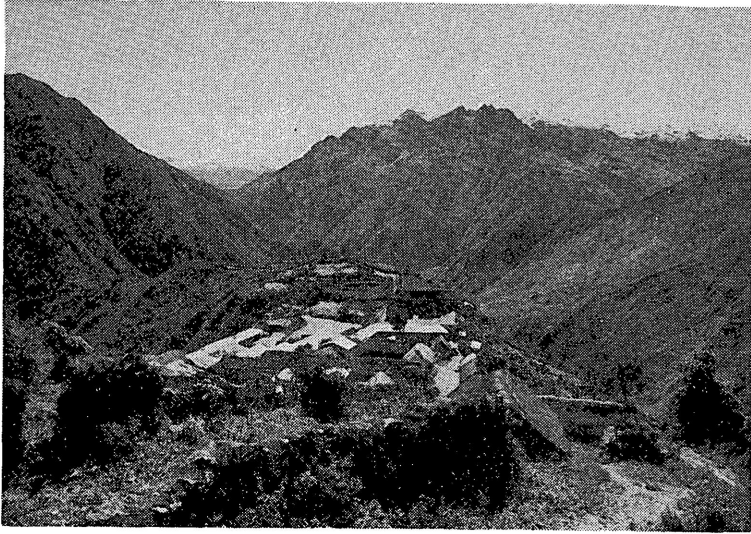


写真2 プエブロ・マルカパタ周辺の景観
 写真中央の集落がプエブロ・マルカパタ。右側の斜面は階段耕地で左側は雲霧林となっている

の道路開通後放棄された耕地で、現在一部に耕地がみられるものの、大部分は森林である。そこでの構成樹種をみると、*Brachyotum quinquenerue* や *Micohia* sp. (ノボタン科), *Baccharis genistelloides* (キク科) などの灌木ないしは小灌木がほとんどである。いっぽう、左岸の雲霧林は *Polylepis racemosa* (バラ科), *Fuchsia* sp. (アカバナ科) などがみられ、また直径 40~50 センチメートルに達する木も多く、極相林であるとかんがえられる。つまり、前者は二次植生であり、後者はほとんど人手が加わっていない

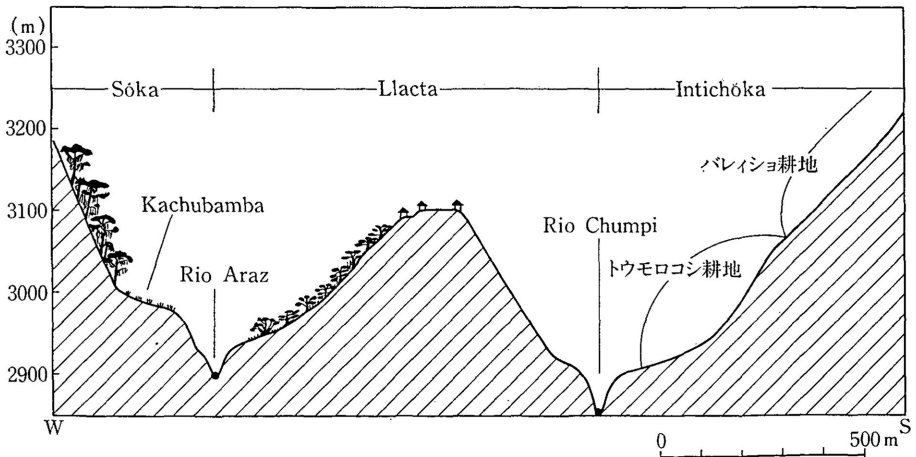


図5 プエブロ・マルカパタ周辺部断面図

いことをよく示している。

アンデネスのあるところは北むきの斜面で、インティチョッカ (intichoka) とよばれる。インティとは、太陽のことで、陽あたりの良い部分をさしている。いっぽう、雲霧林のみられるあたりはソカ (soka) とよばれる。寒さのために何もできないところである。また、このソカの下部、アラス川流域の平坦地も、やはり寒さのため、草地帯となっていて、この部分はカチュバンバ (kachubamba) といわれる。バンバ (bamba) は、なだらかな平坦地をさす地形的概念であり、カチュ (kachu) は雑草であり、雑草しか生えない平坦地、というような意味である。とにかく、このようにプエブロ・マルカパタ付近では斜面の向きが農業に大きい影響を与えていることがうかがえる。

雲霧林の上限は谷によって若干異なるが、海拔3,200メートル～3,400メートルあたりから、樹高せいぜい1～2メートル程度の灌木ないしは小灌木がめだつようになる。*Baccharis* sp., *Chuguraga* sp. (キク科), *Brachyotum* sp. (ノボタン科), *Berberis* sp. (メギ科) などの灌木である。これらの灌木類は海拔3,800～3,900メートルくらいまでみられるが、そのような高地では乾燥と低温のため、その分布は川の流域などにそった窪地状の谷間に限定され、その周囲は草原地帯となっている。

ところで、このあたりの気象条件をハトハ (海拔3,726メートル) のデータを参考にみてみよう。気温はひくく、とくに5月から8月にかけての乾期は最低気温が氷点下になる。また、この時期の気温の日変化は大きく、20°C ちかくに達し、熱帯高地の特徴をよく示している。降雨量、湿度については、図4に示されているようにハトハがアンデス東支脈の西側に位置しているため、そのデータをそのままマルカパタ地区の高地部にあてはめることはできない。しかし、キンセミル、オヤチュアのデータとの比較から、アンデス東斜面に位置するマルカパタは、低地部から高地部へゆくにつれて、降雨量は減少し、降雨量のおおい雨期とすくない乾期に明瞭にわけられるようになり、気温についても低くなるだけでなく、日較差が大きくなる、などの傾向がうかがえる。

さて、草地帯は、地形との関連でいうと、V字谷からU字谷にかわるあたりからであり、したがって、まばらに灌木のはえるせまい谷をつめてゆくと急に谷がひらけて草地帯となる、といった状態にある。海拔4,700～4,800メートルまでつづく草地帯は、4,400～4,500メートルあたりの標高でふたつにわけられるようである。イチユ (ichu, *Stipa* spp.) というイネ科の植物が優占する4,400～4,500メートルまでのゾーン、それから4,700～4,800メートルまでの *Luzula* sp. (イグサ科), *Alchemilla* sp. (バ

ラ科), *Nototriche* sp. (アオイ科) などの高山植物が優占するゾーンである。マルカパタで、これ以上の高度をもつところはアウサンガテ山群周辺のみで、そこは標高5,000メートル前後のツンドラ地帯と氷雪地帯となっている。

Ⅲ. マルカパタの概況

1. マルカパタの歴史

マルカパタの歴史については、今回の調査ではほとんど資料が得られなかったため、くわしいことは明らかにしえなかった。しかし、マルカパタの高地部には、随所に遺跡がみられ、村人によれば、それらはすべてインカ、もしくはプレ・インカ時代のものであるという。また、佐藤によれば、調査期間中にもこれらの遺跡からインカ時代の土器片が採集された、という。これらのことから、インカ時代にはすでにマルカパタにはかなりの集落があったとみてよさそうである。

じっさい、16世紀の年代記作者、シエサ・デ・レオンの記述のなかに、マルカパタの名が見られる。それは、つぎのようなものである。

インカ帝国10代目の王、「インカ・ユパンキは、東方の、数日の行程のところ、人口の多い大きな地方があるという、耳よりの情報を得た。この知らせを得て、彼はそれを発見したいと思い、前進した。しかし、クスコでなにか暴動が起きたという報告をうけたので、マルカパタという町に到着していたが大急ぎでクスコに戻り、そこに数日止まった」[シエサ・デ・レオン 1979 (1553): 234]。

この記述から判断すると、インカ時代には、すでにマルカパタには町があり、またインカ帝国の中心地クスコとも何らかの関係をもっていたことがうかがえるのである。

なお、この記述にみられる「マルカパタという町」は、現在のプエブロ・マルカパタであるとかんがえられ、現在もこの村だけがマルカパタの集落のなかで、ケチュア語で町、村を意味するヤクタ (*llacta*) とよばれている。その後、土地の所有権を示す登記証、ティトゥロ (*titulo*) には、1623年にすでにマルカパタの土地の境界が明示されており、その領域は現在のマルカパタ地区にほぼ対応している。

現在の村人が記憶している範囲内でのその後の大きな変化は自動車道路の開通のようである。村人の話によれば、1937年か1938年、クスコからウルコスを経て、キンセ・ミルに至る自動車道路が開通した。それまでは、プエブロ・マルカパタからウルコスまで徒歩で1週間前後要したといわれるが、現在はトラックで普通なら1日足らずに

なった。この道路開通はマルカパタからクスコなどの都市部へのアプローチを容易にただけではなく、都市部からの物や人の移動も容易にした。その結果、一部地域では経済的・社会的変化をひきおこしている。

その、もっとも顕著な例は、この自動車道路ぞいの低地部で、そこはこの道路開通後、プーノ、シクアニ (Sicuani)、クスコなど、マルカパタ地区以外の地域から移住してきた者たちで占められている。現在のところ、彼らはマルカパタの農牧民とは日常生活の場において、社会的・経済的・宗教的に、ほとんど関係をもたないため、その影響は最小限にとどまっている⁶⁾。この自動車道路の開通はプエブロ・マルカパタの住人にもかなりの影響を与えたが、それは次節以下で述べることにする。

いずれにしても、この自動車道路には不定期に通う乗り合いトラックしかなく、しかも、雨期にはしばしば通行不能となる。また、マルカパタの農牧民の居住地の大半は、この自動車道路からも徒歩で1～2日の距離に散在しており、それらは現在なお、隔絶された地域となっていることにはかわりはない。

2. コムニダと集落

さきに、マルカパタ地区の領域面積は約2,000平方キロメートル、人口が約6,000人と述べた。しかし、じつのところ、マルカパタ地区のくわしい地図はまだなく、人口にかんする信頼できるデータも今回の調査では得られなかった。そのため、上記の数値は村人の情報をもとに推定したきわめておおまかなものである。もうすこしくわしく述べると、領域の面積については、おおよそ1,700～1,800平方キロメートルと算出できるので、人口密度は3～4人/km²であろう。1961年のセンサスによればキスピカンチス郡全体では、その面積は約7,200平方キロメートル、人口は約7万人で、人口密度は約10人/km²である [INSTITUTO NACIONAL DE PLANIFICACION 1969: 258]。したがって、マルカパタ地区はキスピカンチス郡のなかでもかなり人口の稀薄な地域であるといえる。

さて、マルカパタ地区 (Distrito Marcapata) は、行政的には、さらに4つの地域にわけられる。マルカパタ・コヤナ (Marcapata Collana)、プイカ (Puica)、サワンカイ (Sawancay)、コヤスーヨ (Collasuyo) の4つのコムニダ (Comunidad)である。この4地域は、コムニダとよばれていることでも明らかのように、たんに行政上の区

6) 宗教的には、この地域の住民のほとんどがカトリックであるのに対し、この低地部の住民はプロテスタント系のアドベンティスタである。したがって、彼らはマルカパタでおこなわれる祭などにも参加しない。

画であるにとどまらず、それぞれ村落共同体的な性格をもっている。

じっさい、マルカパタの住人の表現によれば、マルカパタはタワンティン・アイユウ (tawantin ayllu: 4つのアイユウ) からなっており、コムニダはアイユウである、という。アンデス村落の構成単位である^{アイユウ}部落組織は、その起源をインカ時代以前にまでさかのぼって求めることができ、クスコ県のチンチェーロ (Chincheru) では現在もアイユウはその地域の住人の第一次的生活領域として意識され、実際に保持されている、とされる [三浦 1963: 2]。

マルカパタの場合も、各コムニダごとに、守護聖人もしくは主要聖人 (Patrón Santo) を祭祀している。また、毎月末に各コムニダごとにコムニダの総会、アサンブレア (asamblea) がおこなわれ、それに出席することがコムニダの構成員、コムネロ (comunero) の義務とされる。このアサンブレアでは、コムニダにある道路や学校などの補修にたいする共同労働、ファイナ (faina) の日程や役割が決定される。さらに、後述するように共同耕地の管理、運営に際しても、コムニダの規制が働いているのである。

また、比較的最近まで、コムニダの境界を毎年定期的に巡回してまわるデスリンデ (deslinde) がおこなわれていた。デスリンデは、原則としてコムニダの成人男子全員が参加し、メスティーンは馬に乗り、インディオは徒歩で、食事をもち、楽団をひきつけて、境界 (lindero) をみてまわる行事である。これは、境界の不明確なところに石や土塊を置いてゆく作業で、普通数日から約1週間を要した、とされる。ときに、この境界をめぐるデスリンデの最中にも、隣接するコムニダの人間とはげしい争いがおこったといわれる。これらのことから、マルカパタにおいても各コムニダの領域はそこに成員権をもつコムネロにとって、彼らの生活領域として、つよく意識されていることがうかがえよう。

マルカパタの4つのコムニダの領域は、図6に示すように基本的に川ないしは尾根によって、その境界が区切られている。マルカパタ・コヤナの領域は、ラッコ (Lacco) 川左岸からチュンピ (Chumpi または Chumpe) 川流域にかけての地域である。サワンカイは、このラッコ川とコヤスーヨ川の間位置する地域で、マルカパタ・コヤナとはラッコ川で、コヤスーヨのコムニダとはコヤスーヨ川で区切られている。コヤスーヨの領域は、コヤスーヨ川左岸から東部の地域にある。

プイカの領域は、おおまかにいって、マルカパタ川とその支流、アラス川流域にあたる場所であるが、その領域は高地プイカ (Puica Alta) と低地プイカ (Puica Baja) のふたつに分けられる。高地プイカはアラス川上流域にあたる地域で、海拔約3,000

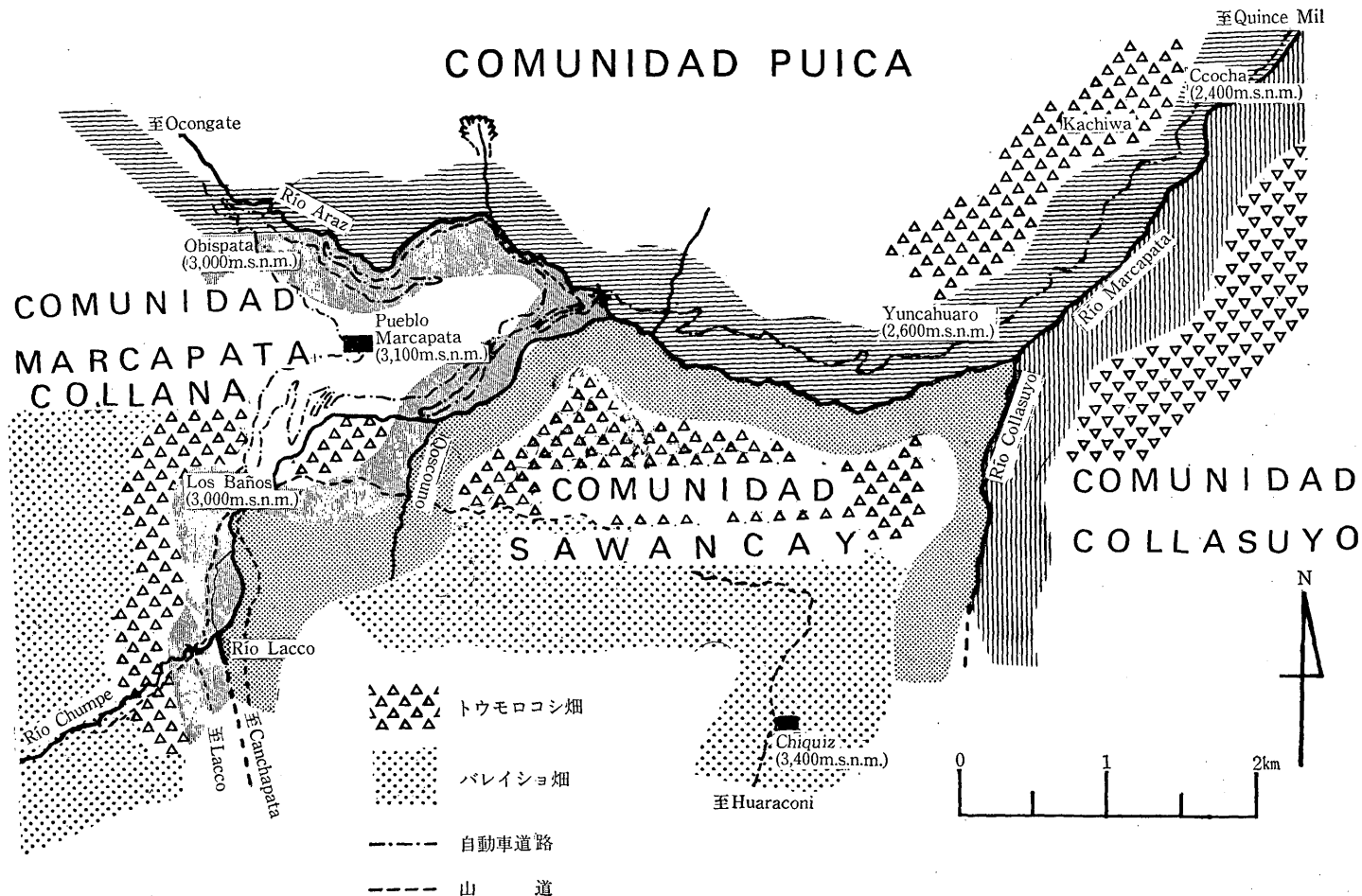


図6 プエブロ・マルカパタ周辺部における4つのコミュニティの領域 (1978年12月～1979年1月測量)

メートルのところに位置するオビスパタ (Obispata) 村 (Upispata ともいう) から下は海拔約 2,400メートルあたりまでの右岸がその領域となる。低地プイカは、海拔 2,000メートルあたりから下部のマルカパタ川流域である。この高地プイカと低地プイカの間接地帯にあたる、コチャ (Ccocha) からティオ (Tio) までのマルカパタ川左岸は、マルカパタ・コヤナの領域で、右岸はコヤスーヨの領域となっている。

さきに地形のところで、マルカパタ川は海拔約2,000メートルから3,000メートルあたりで4本の大きな支流にわかれ、その谷はいずれもふかく、急峻であると述べたが、マルカパタの4つのコムニダは基本的にこれらの谷や尾根にそって区切られているのである。そして、マルカパタ地区の境界は、三方がアウサンガテ山群およびその尾根となっていることから、これらのコムニダはいずれもその領域の最上端部が海拔5,000メートルに達している。

いっぽう、その領域の最下端部は、低地プイカをのぞくと、すべて海拔 2,400メートルから 2,600メートルあたりに集中しているのである。したがって、4つのコムニダの領域は海拔 2,500メートルあたりから5,000メートルまでのすくなくとも2,000メートルあまりの高度差を有していることになり、各コムニダの村落共同体的な性格をかんがえるとき、これは利用可能な高度域が等しいという点で注目し値する。

ところで、このような各コムニダの領域内に、数戸程度の小さい集落から100戸ほどの比較的大きな集落が散在している。マルカパタ全体としては、集落は海拔1,000メートルあまりのところから4,300メートルあまりのところまで幅広く分布している。しかし、本稿で研究対象としている農牧民の集落のほとんどは、3,000メートル以上の高地にあり、とくに3,400～3,500メートルから4,000メートルあたりの高度域に集中している(表2)。

3. ミスティとインディオ

前節で述べたように、4つのコムニダは、すべて海拔2,600メートルあたりで、その領域の下部が接しているが、このちかくにマルカパタの中心地、プエブロ・マルカパタがある。そこは3本の大きな谷が合流するところで、しかもそれぞれの谷に各コムニダの集落が散在しているため、プエブロ・マルカパタはちょうど4つのコムニダの扇のかなめ的なところに位置していることになる。先述したように、マルカパタではプエブロ・マルカパタだけがヤクタ (llacta)、他の集落は一般にセクトール (sector) とよばれており、この村がもつ特異な性格がうかがえる。

「ペルー・ケチュア地名辞典 (Topónimos Quechuas del Perú)」によれば、マル

表 2 主要村落と人口 (マルカパタ保健所の資料 [1979年10月] による)

コミュニティ	主要村落名	海 抜 (m)	マルカパタからの距離 (徒歩による所要時間)	人口 (周辺の集落を含む)	教師数
Marcapata	Marcapata	3,100	—	713	14
Collana	Chumpi	4,000	3	456	2
	Lacco	3,800	4	343	1
Sawancay	Chile chile	2,100	4	220	3
	Canchapata	3,700	3	323	1
	Chiquis	3,400	1	262	2
	Layampampa	?	6	288	1
Collasuyo	Huaracconi	4,300	16	255	1
	Tilpa	3,500	7	247	1
	Chillemocco	3,500	8	213	1
	Yanaccocha	?	12	233	1
	Yanacancha	?	14	273	1
Puica	Capire	2,600	5	244	2
	Huayllayoc	3,500	1	240	1
	Coline	4,000	6	289	1

(注) この資料は学校のある比較的大きい村にかざられている。村の標高は筆者が高度計で測定した。

カパタのマルカ (marca) は集落を、パタ (pata) は台地とか高いところを意味することばで、マルカパタは「高台の集落」の意である、とされる [ESPINOZA 1973: 282]。この字義どおり、プエプロ・マルカパタはまさしく、三方が急坂ないしは崖状になっている尾根上に位置する村である。さきの図 5 に示したように、アウサンガテ山群から東にはりだすこの尾根の北側は標高差 200~300メートルの急傾斜地となっており、南側もほとんどのところで崖になっている。また、この尾根の東端部も、アラス川とチュンピ川の合流点に切れ落ちているのである。

さて、プエプロ・マルカパタは図 7 に示すように東西に走る通りを中心に格子状のプランをもっており、約 100 戸の住居のほか、この町の西端高台には、町をみおろすように小聖堂 (capilla) が位置し、東端部には広場 (plaza) がある。この広場のまわりに教会、保健所、学校、村役場、農業指導員詰所、地方教育委員会等の公的機関ならびにその出張所がある。そのほか、マルカパタのなかで、このプエプロ・マルカパタだけでみられるものに郵便局、警官派出所、数軒の商店などがある。

これらの商店で売られているものについてみると、パン、塩、砂糖、ココア、酒、灯油、衣類、菓子類、衣料、清涼飲料水、医薬品などである。このほか、時々これらの店頭には少量のタマネギ、ニンジン、キャベツ、ニンニクなどの野菜類がみられる。また、広場では、日曜日などにミカン、バナナ、パイナップル、アボカドなどの熱帯

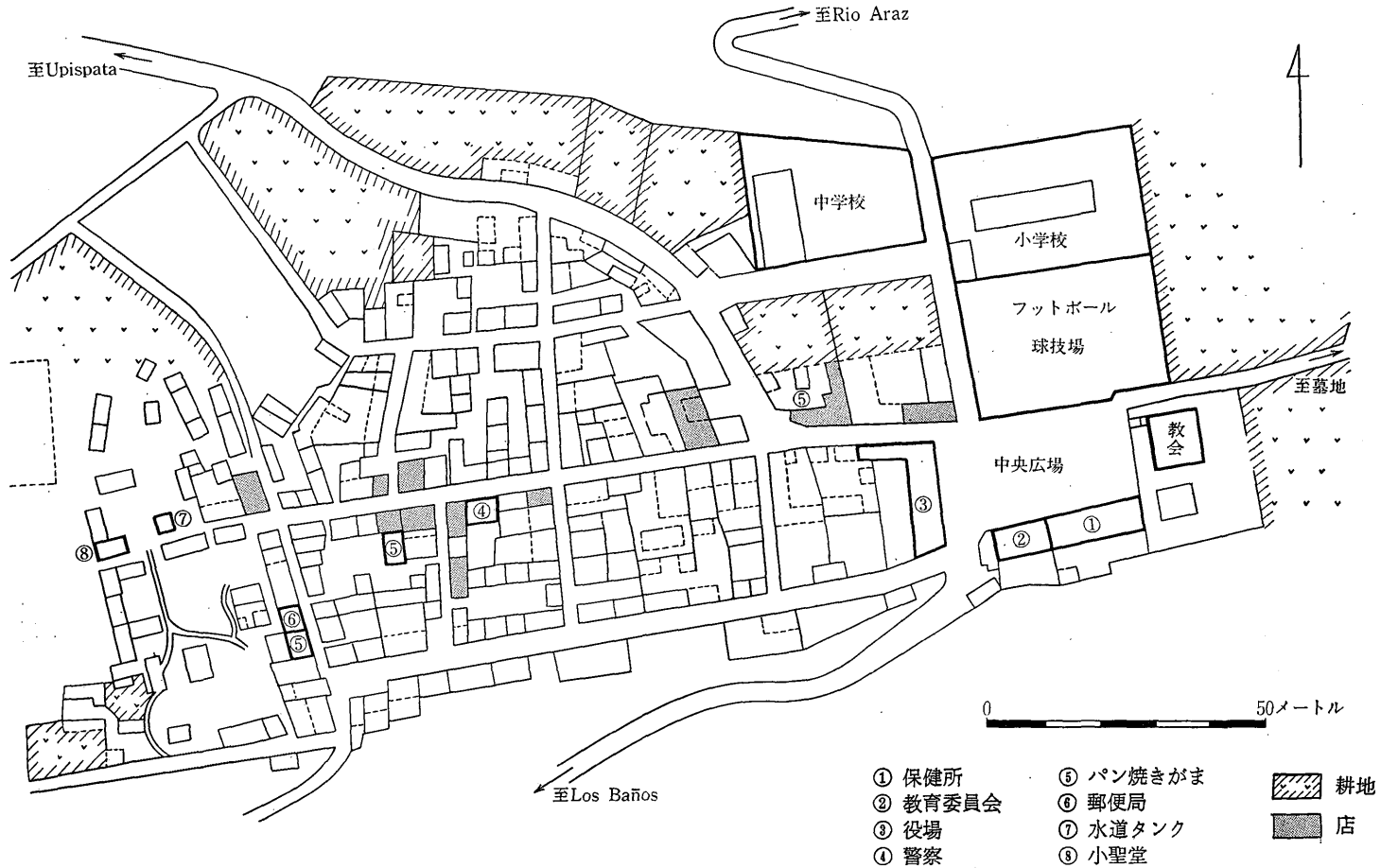


図7 プエブロ・マルカパタ (村役場の資料を一部補正)

低地の産物が売られることがある。これらのうちで、マルカパタの農牧民にとって必要不可欠といえるものは塩とココくらいである。また、マルカパタではこれらの商店以外マーケットといえるものはまったくみられない。すなわち、すくなくとも食料にかんしては自給自足しており、自給できない場合でも、交換などによりその地域内での自給自足につとめていることがうかがえるのである。

さて、一般にプエブロ・マルカパタの住人はミスティ (misti) とよばれ、この村以外の住人はルナ (runa) とよばれる。これはスペイン語でそれぞれメスティーソ (mestizo), インディオ (indio) に相当する言葉であるといわれる。さらに村人たちの表現によれば、ミスティはケチュア語のほかにスペイン語も話せる人のことであるのに対し、ルナはケチュア語だけ話し、とくにルナの女性はモンテラ (montera) とよばれるこの地方特有の帽子や衣服を身につけている、とされる。

一般にメスティーソは白人とインディオの混血と解されているが、マルカパタではそのような人種的なちがいがより、むしろ経済的、文化的な条件によって区別されているようにおもわれる。この点については、佐藤によって詳しく検討される予定なので、本稿では一応、ルナをより伝統的な農牧生活をおくっているインディオのこととし、ミスティは経済的、文化的に変容を受けた人たちであるとしておこう。

じっさい、プエブロ・マルカパタの住人の家族のなかには、リマクスコなどの都市部で生活する者も多い。また、先述した自動車道路開通後、季節労働者として道路工事に従事したり、プエルト・マルドナド (Pto. Maldonado) などに一時的に移住し、カスタニエロ (castañero) とよばれるカスターニャ (ブラジル・ナッツ) 採集人として出稼ぎにゆく者も少なくない。つまり、ミスティは程度の差こそあれ、つねに外部社会の影響をうけているのである。それに対し、インディオはマルカパタ地区内、それもそれぞれが成員権をもつコムニダ内に、ほとんどその生活範囲がかぎられる。

しかし、生業のうえでは、ミスティをも含めてマルカパタの住民の大半は、農業および牧畜をおこなって生計をたてている。表3は、プエブロ・マルカパタの住民のうち、調査のできた64世帯中耕地および家畜を所有する54世帯のそれぞれの内訳を示したものである⁷⁾。これによっても、明らかなように、ほとんどがトウモロコシ、バレイショの耕地をもち、家畜も所有しているのである。すなわち、外部社会の影響をつよくうけ、貨幣経済にまきこまれているとかがえられるミスティでさえも、その食糧に関しては自給自足的傾向がつよいとかがえられるのである。

7) 耕地も家畜ももたない、のこりの10世帯の職種の内訳は カスタニエロ 3, 商人 3, 大工 1, 郵便局員 1, 不明 2 である。

表3 プエブロ・マルカパタの世帯(1979年3月)

世帯番号	所属 コミュニティ ¹⁾	世帯の人数 ²⁾			パレイシヨ ³⁾	トモコ ⁴⁾	ウロウ	マ	リヤマ	アパルカ	ウシ	ヒツジ	備考
		男	女	計									
1	S	4	3	7	10	8	—	—	—	—	—	—	役場勤務
2	S	3	3	6	2	1	—	—	—	—	—	—	カスタニエロ
3	C	4	4	8	10	5	10	—	—	—	5	—	教師
4	M	2	1	3	4	6	—	—	—	—	—	—	
5	M	2	3	5	5	1	—	—	—	—	—	—	
6	S	1	1	2	10	5	3	—	5	13	—	—	
7	S	1	2	3	10	5	6	—	15	30	20	—	商店経営
8	S	2	4	6	6	2	1	—	—	—	8	—	運転手
9	M	2	3	5	8	3	—	—	—	—	—	2	カスタニエロ
10	P	1	1	2	10	1	—	—	—	—	—	—	
11	P	2	3	5	10	3	—	—	—	—	3	—	
12	P	0	1	1	15	6	2	—	—	—	—	—	
13	S	4	2	6	20	5	1	—	—	—	10	—	
14	P	2	2	4	5	3	—	—	—	—	3	—	
15	P	5	1	6	10	4	2	—	—	—	14	—	
16	P	1	2	3	10	6	4	—	10	13	—	—	
17	P	4	1	5	20	10	5	—	—	—	10	—	
18	M	2	5	7	10	3	6	—	—	—	10	4	商店経営
19	M	3	2	5	1	2	—	—	—	—	1	6	カスタニエロ
20	M	1	3	4	4	2	—	—	—	—	7	—	商店経営
21	M	2	1	3	2	1	—	—	—	—	—	—	
22	M	1	3	4	4	2	1	—	—	—	—	—	
23		1	0	1	4	2	—	—	—	—	—	—	
24	M	1	3	4	4	1	—	—	—	—	—	—	
25	M	2	3	5	1	1	—	—	—	—	—	—	大工
26	M	4	3	7	3	3	1	—	—	—	—	—	運転手
27	M	1	3	4	5	2	4	—	—	—	30	4	運転手
28	M	2	2	3	7	5	4	—	—	—	14	—	
29	P	1	0	1	2	1	4	—	—	—	15	—	運転手
30		4	4	8	2	1	—	—	—	—	—	—	
31		1	5	6	—	—	—	—	—	—	3	—	保健所勤務
32	M	3	3	6	4	2	1	—	—	—	—	—	
33	P	4	1	5	5	1	1	—	—	—	4	—	商店経営
34	P	2	1	3	16	4	—	—	—	—	—	—	
35	S	1	0	1	6	4	—	—	—	—	—	—	
36	P	2	2	4	10	5	10	—	—	—	20	—	
37	M	1	2	3	10	4	—	—	20	4	—	12	
38	P	1	0	1	10	5	2	—	3	—	—	—	
39	M	4	3	7	6	2	8	2	—	—	60	—	
40	P	4	2	6	2	5	—	—	—	—	—	—	
41	P	2	5	7	7	8	6	—	—	—	15	—	
42	P	6	3	9	20	4	3	—	—	—	—	3	
43	M	1	1	2	9	5	8	—	—	—	13	—	
44	M	2	1	3	4	3	—	—	—	—	—	3	
45	M	1	1	3	4	4	1	—	—	—	1	—	
46	M	4	1	5	3	4	—	—	—	—	—	—	
47	M	2	0	2	6	2	—	—	—	—	—	—	
48	S	3	2	5	10	4	6	—	—	—	1	2	カスタニエロ
49	S	3	2	5	1	—	1	—	—	—	—	—	
50	M	1	1	2	2	1	—	—	—	—	2	—	
51	M	3	3	6	6	3	15	—	—	—	10	—	
52	M	4	2	6	—	—	—	—	—	—	1	—	
53	S	1	0	1	6	4	—	—	—	—	5	—	
54	M	0	3	3	2	1	—	—	—	—	—	—	
		計			363	167	118	2	53	334	56		

1) S:サワンカイ, C:コヤスーヨ, M:マルカパタ・コヤナ, P:パイカ, 無記入は無所属を示す。2) 世帯主をふくむ。3) 単位はsaco(馬用の輸送袋に種イモをつめた1袋分) 4) 単位はアローバ

ところで、プエブロ・マルカパタは領域のうえではマルカパタ・コヤナに位置しているものの、その住人が成員権をもつコムニダはさまざまである。すなわち、この村には、表3にも示されているように、マルカパタ・コヤナだけでなく、プイカ、サワンカイ、コヤスーヨなどのコムニダに成員権をもつ人々が住んでいる。かつては、このプエブロ自体が4つの区画にわけられ、各区画はそれぞれのコムニダが所有するところであり、そのコムニダに成員権をもつ人間だけが居住していた、とされる。

その後、これは異なるコムニダに属しているコムネロ間の結婚などによってくずれ、現在はその区画もあいまいなものとなっている。しかし、インディオにかぎってみると、現在なお異なるコムニダ間の通婚関係はないとされ、また他の村からインディオがこのプエブロにきたときは、おなじコムニダに属しているミスティのところでは食事を提供してもらったり、宿泊させてもらうという関係が現在もみられる。また、さきに述べたコムニダの集会、アサンプレアが毎月末の日曜日に、やはりこのプエブロ・マルカパタの4カ所で、コムニダごとにおこなわれる。この集会には、同じコムニダに所属するミスティとインディオは全員集まることが義務づけられている。

こうしてみると、マルカパタの4つのコムニダは、そこに成員権をもつミスティやインディオの生活領域としてつよく意識されていることなどから、おなじ地区に属しているとはいうものの、それぞれがまったく独立した存在となっているようにおもわれる。じっさい、インディオは、日常生活のうえで、まったく他のコムニダのインディオとは交渉をもたない。

同時に、これらのコムニダはたんに行政的におなじマルカパタ地区に属しているというだけではなく、あるまとまりをもった地域社会を構成している側面がある。というのは、イグレスシア・ワシチャイ (iglesia washichay) とよばれる行事が、それをよく象徴しているとおもわれるからである。この行事は、プエブロ・マルカパタの教会の屋根を5年ごとにふきかえる儀礼的色彩の濃い作業である。この教会の屋根はイチュでふかれているが、この屋根を4等分し、各コムニダが分担した部分をふきかえるのである。これまでみてきたように、マルカパタでみられる祭や共同労働がコムニダ単位でおこなわれているのに対し、この行事は、ミスティもインディオをも含む地区内の全コムニダの人間によって行われるのである。いずれにしても、プエブロ・マルカパタは、マルカパタ地区の行政の中心であるばかりでなく、各コムニダにとっても政治、祭祀の中心地となっている。そして、マルカパタの4つのコムニダは、このプエブロ・マルカパタを中心として統合され、ひとつの地域社会を構成しているのである。

Ⅳ．環境利用

1. 環境区分と栽培植物

1) 環境区分

これまで述べてきたように、マルカパタにおける自然環境はきわめて変化に富んでおり、とくに高度の差による自然条件のちがいがいちぢるしい。このような高度により異なる自然条件の特徴は、マルカパタの農牧民によって、明確に認識、把握され、4,000メートルにおよぶ高度差が利用されて、さまざまな作物が栽培され家畜の飼養がおこなわれている。以下にそれを具体的にみてゆこう。

表4は、マルカパタにおいて、栽培されているのを直接観察することができた作物とその栽培高度域を示したものである。聞きとりによれば、このほかにも若干の作物が栽培されているものとみられるが、それらはいずれもごくわずかに栽培されているにすぎず、重要性もひくいことから、この表のリストでマルカパタの栽培植物の概要を知ることができる⁸⁾。

この表に示されているように、マルカパタにおける農耕限界は海拔4,200メートルあたりまでである。それ以上の高地では寒さのため作物はできないが、自然の草原を利用してリャマ (*Lama glama glama*)、アルパカ (*alpaca, Lama pacos*)、ヒツジなどの家畜が飼われる。このような農耕限界をこえた高地は、一般にリティ・クチュ (*riti cuchu*) とよばれる。

リティ・クチュは、スペイン語では *rincón de la nevada* に相当するといわれることから、厳密には谷の源頭部、氷河末端のすぐ下あたりを示している。そこは、ほとんどの草本類が枯死してしまう乾期にあっても、氷河から流れおちる水によって、つねに草地在り維持されているため、牧畜にとってきわめて重要なところとなっている。したがって、このような地域と完全な氷雪帯を区別する必要があるときは、それぞれリティ・クチュ、ママ・リティ (*mama riti*) とよばれる。村人によれば、ママ・リティは“大量の雪”に相当することばである、という。

作物の栽培高度域は、海拔約1,000メートルの低地から海拔4,200メートルの農耕限

8) この表に示されていない作物のなかでマルカパタの農牧民に不可欠な作物としてココ (*coca, Erythroxylon coca*) があげられる。ココはマルカパタでは低地部で栽培されているらしいが確認できなかった。いずれにしても、その量はわずかで、マルカパタで消費されるココのほとんどはクスコからのもので、先述した商店で売られている。なお、野生植物も重要で、プエブロ・マルカパタ周辺部だけでも100種類をこえる植物が利用され、その用途も薬用、香料、燃料、飼料など多岐にわたる。

表4 マルカパタの栽培植物とその栽培高度域 (1979年1月~2月)

一般名	学名	現地名	1000m	2000m	3000m	4000m
(イモ類)						
パレイシヨ	<i>Solanum</i> spp.	papa				
オカ	<i>Oxalis tuberosa</i>	oca				
オユコ	<i>Ullucus tuberosus</i>	olluco				
イサーニョ	<i>Tropaeolum tuberosum</i>	isaño				
ヤコン	<i>Polymnia edulis</i>	llacón				
ラカチャ	<i>Arracacia xanthorrhiza</i>	viráca				
サツマイモ	<i>Ipomoea batatas</i>	apichu				
*サトイモ	<i>Colocasia esculenta</i>	uncúcha				
マニオク	<i>Manihot esculenta</i>	yuca				
アチラ	<i>Canna edulis</i>	achira				
(穀類)						
トウモロコシ	<i>Zea mays</i>	sara				
キヌア	<i>Chenopodium quinoa</i>	quinua				
(豆類)						
*ソラマメ	<i>Vicia faba</i>	haba				
タルウイ	<i>Lupinus mutabilis</i>	taruhui				
インゲンマメ	<i>Phaseolus vulgaris</i>	frijol				
パッカイ	<i>Inga</i> sp.	pácay				
(果物類)						
ペピーノ	<i>Solanum muricatum</i>	pepino				
カブリ	<i>Prunus capollin</i>	capli				
アボカド	<i>Persea americana</i>	palta				
パパイヤ	<i>Carica papaya</i>	papaya				
パイナップル	<i>Ananas comosus</i>	piña				
グラナディーヤ	<i>Passiflora</i> sp.	granadilla				
グアヤバ	<i>Psidium guajava</i>	guallava				
*柑橘類	<i>Citrus</i> spp.	limón, naranja				
*モモ	<i>Prunus persica</i>	drazno				
(その他)						
カボチャ	<i>Cucurbita</i> spp.	zapallu				
トウガラシ	<i>Capsicum pubescens</i>	locoto				
*バナナ	<i>Musa</i> sp.	plátano				
*サトウキビ	<i>Saccharum officinarum</i>	caña				
*コーヒー	<i>Coffea</i> sp.	café				
アチオテ	<i>Bixa orellana</i>	achiote				
トマト	<i>Lycopersicon esculentum</i>	tomate				
タバコ	<i>Nicotiana tabacum</i>	tabaco				
*タマネギ	<i>Allium cepa</i>	cebolla				
*キャベツ	<i>Brassica deracea</i>	col				

(注) *印は旧大陸起原の栽培植物, 栽培高度域の破線部は栽培面積のちいさいことを示す。

界までの3,000メートルあまりに達する。そして、そこに40種ちかくのさまざまな作物がみられるが、これらのなかでいちじるしく栽培面積が大きく、主作物とみられるのはパレイシヨ (papa, *Solanum* spp.) とトウモロコシ (sara, *Zea mays*) である。パレイシヨの栽培ゾーンは、海拔3,000メートルから4,200メートルあまりまでで、トウモロコシは海拔約1,000メートルから3,100メートルまでである。

すなわち、マルカパタではトウモロコシの栽培の上限は海拔3,100メートルあたりで、そこから上は主としてパレイシヨが栽培されているのである。この海拔3,100メートルという標高は、さきに述べたように、マルカパタの中心地、プエブロ・マルカパタが位置するところである。したがって、表現をかえれば、パレイシヨはプエブロ・マルカパタを中心として、それよりも上で栽培され、トウモロコシは下で栽培されるのである。

このようなプエブロ・マルカパタの上下数百メートルの高度域はヤクタ (llacta) とよばれる。ヤクタは先述したようにケチュア語で町、村を意味し、マルカパタでは一般にプエブロ・マルカパタをさしているが、環境区分のゾーンのひとつとしても用いられるのである。環境区分帯としてのヤクタは、プエブロ・マルカパタ周辺部といった、かなり漠然とした概念であるが、植生のうえではほぼ雲霧林帯に対応しているようである。したがって、ヤクタのゾーンは海拔2,600メートルあたりから、海拔3,400メートルあたりまでとかがえられる。

このヤクタとリティ・クチュ帯のあいだの高度域はプーナ (puna) とよばれる (写

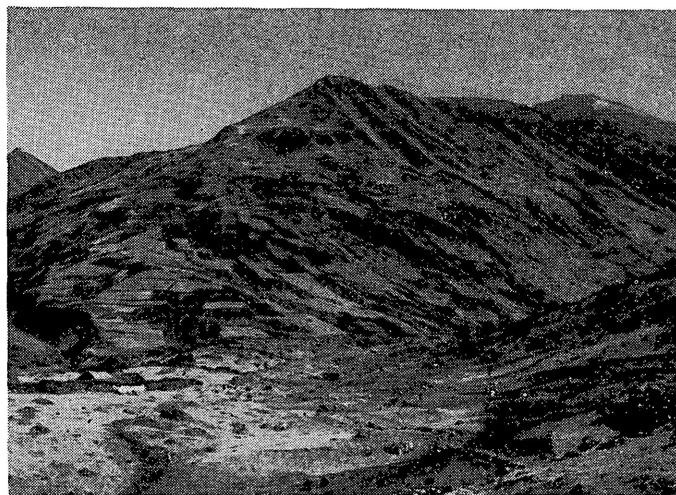


写真3 プーナの景観。パレイシヨが栽培され、家畜が放牧される高地部がプーナである



写真4 ユンカの景観。バナナやサトイモなどができる熱帯低地部がユンカである

真3)。したがって、プーナは植生のうえて、ほぼ草地帯に相当するところである。その上限は村人は「バレイショができるところまで」というが、プーナはたんに高度や植生のみによって認識されているのではなく、もっと高くても、なだらかにひろがる高原はプーナとよばれることがある。とにかく、プーナは寒冷高地となっているため、バレイショをはじめとする寒さにつよい作物が栽培されるほか、やはりリヤマ、アルパカ、ヒツジなどが放牧される場所となっている。

いっぽう、ヤクタ・ゾーンより低いところは一括してユンカ(yunca)とよばれる。具体的には、海拔2,600メートルの位置にユンカワロ(Yuncahuaro)という村があるが、これより低地部の

ことである(図6)。したがって、ユンカは亜熱帯降雨林地帯にあたる場所で、高温で、降水量もおおく、さまざまな熱帯性の果実類ができる場所である(写真4)。

以上、みてきたように、高度差が4,000メートルに達するマルカパタの領域は、マルカパタの農牧民によって基本的に4つの環境区分帯にわけられ、それぞれリティ・クチュ、プーナ、ヤクタ、ユンカとよばれるのである。なお、自然条件の差は高度のちがいでうみだされるものではなく、山腹斜面の向きなどによっても大きく異なっている。とくに、マルカパタのように、ほとんど平坦地がなく、山腹斜面に耕地をもつところでは、それが農業に及ぼす影響の大きいことは、さきにプエブロ・マルカパタ周辺部の例に示したとおりである。

2) 栽培植物

マルカパタでは、さきの表に示したように、多くの栽培植物がみられ、それぞれの特性に応じた高度域で栽培されている。これらの栽培植物のうちで、その栽培面積がひろく、食糧としての重要性がいちじるしくたかいものはバレイショとトウモロコシであるが、その栽培技術については、次節以下であらためて詳述することにして、こ

ここではおもな栽培植物の特色についてふれておきたい。

イモ類

マルカパタの農牧民によれば、主食の7割から8割はバレイショで、その他のイモ類も含めるとイモが食事に占める割合は9割以上になる、という。それだけでなく、そのうえマルカパタでのイモ類の種類は豊富で10種類にも達する。そして、これらのイモ類が、その特性に応じた高度域で栽培され、熱帯低地から寒冷高地まで連続してイモ類の栽培がみられるのである。しかも、それらはわずかに栽培されるサトイモのほかは、全て新大陸起原のイモ類であり、マルカパタにおける伝統的な農耕形態の一端を示すものといつてよいであろう。

高度べつにみてゆくと4,000メートル前後の高地では、バレイショのほか、オカ (*Oca*, *Oxalis tuberosa*), オユコ (*olluco*, *Ullucus tuberosus*), イサーニョ (*isaño*, *Tropaeolum tuberosum*) の3種類のイモ類だけがみられる。これらはいずれも中央アンデス高地に起原をもつとかがえられている作物であり、寒さにつよいという特徴をもっている [HODGE 1951: 180-185]。これにたいして、海拔2,000メートル以下の低地では、サツマイモ (*Ipomoea batatas*), サトイモ (*Colocasia esculenta*), マニオク (*Manihot esculenta*), アチラ (*achira*, *Canna edulis*) などの熱帯または暖温帯起原のイモ類が栽培されている。そして、これらのイモ類がいずれも栽培できないか、または栽培にあまり適さない海拔2,000メートルから3,000メートルあたりの高度にかけて、やはりアンデスの暖温帯起原のラカチャ (*racacha*, *Arracacia xanthoriza*) が主として栽培されているのである。

これらのイモ類のうちでバレイショだけは栽培する高度と時期をちがえることによって1年に4回収穫される。パパ・ミシュカ (*papa mishka*), パパ・マワイ (*papa maway*), パパ・プーナ (*papa puna*), パパ・ルキ (*papa luki*) とよばれるものである。パパ・ミシュカは主としてプエブロ・マルカパタなどのバレイショ栽培ゾーンのなかでは比較的低い、集落周辺で栽培されるものである。パパ・マワイは海拔3,200メートルから3,600メートルあたりまでで栽培される。また、パパ・プーナは、このパパ・マワイの栽培ゾーンの上部から海拔4,100メートルあたりまでで、パパ・ルキは農耕限界にちかい海拔4,200メートル前後の高地で栽培されるバレイショである。なお、マワイとプーナのバレイショ栽培ゾーンの間、チャウピ・マワイ (*chawpi maway*) とよばれるバレイショの栽培ゾーンがあるとされるが、くわしいことは明らかにし得なかった⁹⁾。

9) チャウピ (*chawpi*) には中央という意味があり、村人によればチャウピ・マワイはその収穫期がマワイとプーナのバレイショのちょうど中間になっているものであるとされる (表6参照)。

このように、海拔3,000メートルあまりのところから4,200メートル以上の高地までの広い範囲で栽培されるバレイシヨには、きわめて多くの品種がある。筆者が直接観察することのできたものだけでも50種類をこえ、実際にマルカパタ全域で栽培されているのは100種類をこえる、といわれる。今回の調査期間中に採集されたバレイシヨのうち、これまでに同定のおわったものは、全コレクションのうちの一部にしかすぎないが、それでも種としては2倍体のものから5倍体のものまでの7種がみられた。すなわち、2倍体の *Solanum ajanhuiri*, *S. phureja*, *S. goniocalix*, *S. stenotomum*, 3倍体の *S. chaucha*, 4倍体の *S. andigena*, 5倍体の *S. curtilobum* などである。

このうち、*S. curtilobum* がルキとよばれ栽培ゾーンとしてのルキ帯での主要構成種となっている。アンデス高地で栽培されるバレイシヨのうち、一般に、ルキは苦味がつよいが、耐寒性の点ですぐれている *S. juzepzukii* と *S. curtilobum* の総称となっている [HAWKES 1944]。マルカパタでは5種類のルキがあるといわれることから前者の種がふくまれている可能性もある。とにかく、ルキのバレイシヨ栽培ゾーンは、このような耐寒性のきわめてつよいものだけが栽培されるところなのである。

このルキにみられるように、バレイシヨは種ないしは品種によって耐寒性の程度がことなり、それはまたマルカパタの農民によって明確に認識、把握されている。したがって、高度によって栽培される種類が異なっていることが当然かんがえられるが、まだ十分な採集調査ができていないため、くわしくは今後の課題としたい。

穀類

穀類は、多種多様なイモ類とは対照的に、わずかにトウモロコシとキヌアがみられるだけである。キヌア (*quinua*, *Chenopodium quinoa*) はアカザ科の植物で厳密には穀類とはいえないが、アンデスでは、古くからトウモロコシの栽培できない寒冷高地における唯一の雑穀として広く栽培されているものである。しかし、そのキヌアでさえも、マルカパタでは、儀礼用などのために、ごく少量栽培されているだけであり、穀類としてはトウモロコシに全面的に依存しているといつてよい。

しかし、トウモロコシはさまざまな品種が栽培されており、その品種は果穂や穀粒に形態や色の変異が大きく、きわめて大きな多様性を示している(写真5)。たとえば、穀粒の色だけでみた場合でも、白トウモロコシ (*yurac sara*)、黄トウモロコシ (*quello sara*)、赤トウモロコシ (*puca sara*)、黒トウモロコシ (*kulli sara*) などのほか、これらの色の組み合わせや斑点模様などによって、呼称が異なり、品種名が与えられている。

これらのトウモロコシは、形態や色だけでなく、生理生態的にもかなり品種分化が

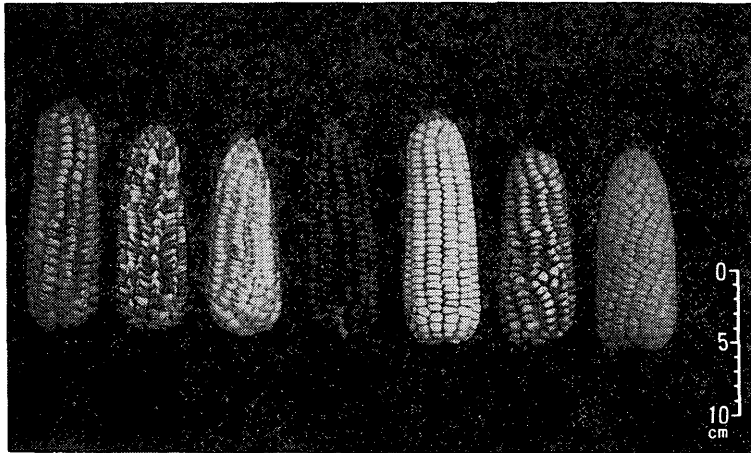


写真5 マルカパタのトウモロコシ (ワリ・サラ)

おこっているものとかがえられる。というのは、マルカパタではトウモロコシは海拔1,000メートルの低地から海拔3,000メートルあたりまでの幅広い高度域で栽培されるが、この栽培高度域が3つに分けられる。そして、この3つのゾーンで栽培されるトウモロコシは、ヤクタのトウモロコシ (*llacta sara*)、ワリのトウモロコシ (*wari sara*)、ユンカのトウモロコシ (*yunca sara*) とよばれ、それぞれのゾーンでしか栽培できないといわれている。

ヤクタ・サラは字義どおり、ヤクタのゾーン、すなわち海拔3,100メートルあたりから2,600メートルあたりまでの高度域で栽培されるトウモロコシの総称である。ユンカ・サラはユンカのトウモロコシの意味であるが、環境区分帯としてのユンカよりはもう少しひくい、海拔2,000メートル以下の低地部で栽培されるトウモロコシである。ワリのトウモロコシはこれらのヤクタとユンカの間接地帯、海拔約2,000メートルから2,600メートルあたりまでで栽培されるものである。

これら栽培高度の異なる3つのトウモロコシの品種群、ヤクタ・サラ、ワリ・サラ、ユンカ・サラにそれぞれさまざまな品種がふくまれているわけであるが、これらの果穂の比較をしたのが図8である。穀粒の大きさについては顕著な差がみとめられなかったので、果穂の長さとして示した。これによれば、一般にヤクタ・サラは果穂が小さくて丸く、ユンカ・サラは細くて長い。ワリ・サラはちょうどこれらの中間タイプとなっている。このように、ヤクタ・サラは小さいだけでなく、トウモロコシ栽培ゾーンのなかではもっとも高いところで栽培されるため、収穫までの成育日数も長い。いっぽう、ユンカ・サラは大きくて、また低地部で栽培されるため、成育日数も短い。したがって、これらのトウモロコシのなかでユンカ・サラがもっとも

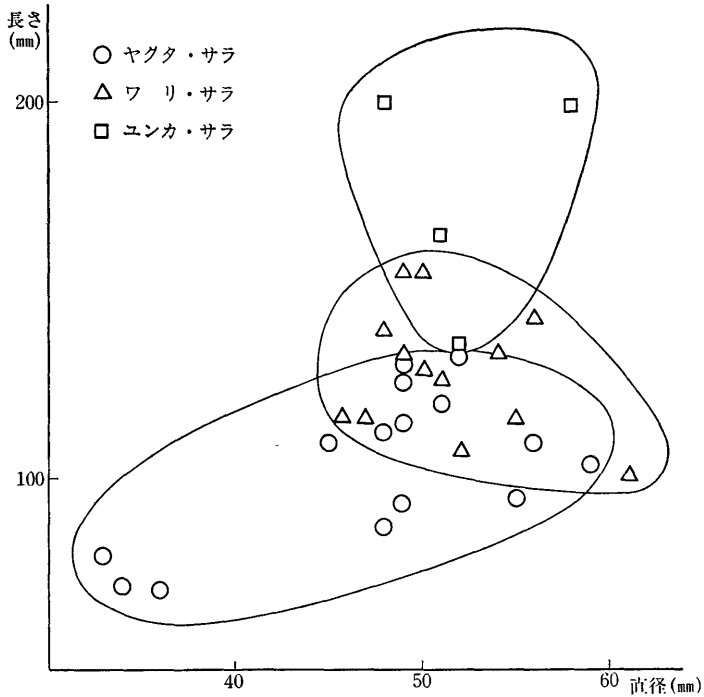


図8 マルカパタ産トウモロコシの果穂の比較

効率のよい品種群であるようにおもわれるが、マルカパタでもっとも好んで栽培されるのはヤクタ・サラで、次いでワリ・サラである。味の点で、ヤクタ・サラはもっともすぐれており、ついでワリ・サラで、ユンカ・サラはまずいため、もっぱら家畜の飼料とされる、といわれる。

最後にトウモロコシの利用についてふれておくと、マルカパタではトウモロコシは食料としてよりも酒の材料としての役割の方がはるかに重要であるようである。トウモロコシの主たる料理はゆでたモテ (mote) か炒ったカンチャ (cancha) であるが、これらは主食としてよりむしろ間食ないしは副食的な色彩のつよいものである。いっぽう、トウモロコシの発酵酒、チチャ (chicha) は祭のときはもちろん各種の儀礼でも大量に消費されるほか、畑仕事などにも携行されるなど、日常生活にも不可欠なものとなっているのである。

豆 類

豆類では、ソラマメ (*Vicia faba*) とタルウイ (tarhui, *Lupinus mutabilis*) だけが独立した耕地をもつことがあるが、その他のものはまれにしかみられず、またその栽培面積も小さい。タルウイは、これらの豆類のなかで、もっとも寒さにつよく、また乾

燥にもつよいため、主としてバレイシヨのマワイ栽培ゾーンで栽培される。後述するように、バレイシヨ耕地の一部は輪作されるが、その際に2年目の作物として栽培されるのである。いっぽう、ソラマメは主としてヤクタ・サラのトウモロコシ耕地で混作ないしは間作される。

果物類とその他の作物

果物類をふくむその他の作物の栽培はほとんど低地部に限定されているが、これらはマルカパタ本来の住民の経済とは関係をもたない。さきに述べたようにマルカパタの低地部は低地ブイカに属しており、その住人のほとんどは近年になって移住してきた人たちである。したがって、この低地部で栽培される作物のうち、果物類、バナナ、コーヒー、サトウキビ、トウガラシなどはすべて換金作物であって、ウルコスやクスコなどの都市部に出荷されるのである。

なお、これらの作物のうちでトウガラシについては、すこしふれておきたい。このトウガラシの栽培高度域がとくにウチュ・ウライ (uchu uray) とよばれて環境区分帯のひとつとして扱われているからである。ウチュは、トウガラシの総称であるが、マルカパタでみられるものはアンデス地帯に分布が限定される種 (*Capsicum pubescens*) で、耐寒性はつよいが高温にはよわいという特性をもつものである [HEISER and SMITH 1948: 331-335]。したがって、マルカパタでも、その栽培は海拔1,200メートル以下ではほとんどみられないが高地部では海拔3,500メートルちかくまでみられる。ウチュ・ウライは、この栽培高度域のうちの海拔1,500メートルから2,500メートルあたりまでの栽培にもっとも適しているところをさしているようである。

以上、マルカパタでみられるおもだった作物の特色について述べてきたが、これらを全体としてみるとマルカパタにおける重要な栽培ゾーンはワリ・サラのトウモロコシ栽培ゾーンより上部、すなわちマルカパタの環境区分帯でいうとヤクタ・ゾーンより上部地域ということになりそうである。それは、ちょうどマルカパタの各コミュニティがその領域内にもっている高度域となっているのである。したがって、これより低地部については以下の報告の対象から除くことにしたい。

2. 耕地の型と分布

耕地はケチュア語でチャクラ (chakra) とよばれるが、このチャクラにはふたつのタイプがある。キタ・チャクラ (kita chakra) とバンダ・チャクラ (banda chakra)

とよばれるものである¹⁰⁾。キタ・チャクラは世帯ごとに個別に利用する耕地で、バンダ・チャクラは共有地的な性格をもつ耕地である。以下にこれらふたつの耕地について、それぞれ、その機能と分布について述べることにしよう。

キタ・チャクラ

キタ・チャクラは、一般に集落に隣接する比較的小さい耕地である。たとえば、さきに示したプエブロ・マルカパタの図7で村の周辺にみられた耕地はすべてキタ・チャクラである。また、写真6はプエブロ・マルカパタとロス・バーニョスのあいだの斜面にみられるキタ・チャクラを示したものであるが、この耕地は写真にみられる自動車道路の開通まで、バンダ・チャクラであったといわれている。

つまり、バンダ・チャクラはコムニダの領域の一部を石垣などの垣根、ピルカ (pirka) によって区切られた伝統的な耕地で、そのなかに原則的にコムニダの世帯すべての耕地がみられるものである。それが、自動車道路がこの耕地を横切って、つけられたため、家畜の侵入を防ぐための垣根がその機能をはたさなくなり、耕作者ごとに、その耕地の周囲に垣根をもうけ、個別に利用するようになったのである。それがキタ・チャクラである。



写真6 キタ・チャクラの耕地

10) スペイン語の *chacra* (耕地) はケチュア語起源である(増田教授の御教示による)。いっぽう、バンダ (*banda*) は帯、しま模様を意味するスペイン語であるとおもわれるが、ケチュア語でバンダ・チャクラを示すケパ・チャクラ (*qepa chacra*; 背後の耕地) よりむしろ一般的に使われている。なお、ケチュア語のキタ・チャクラのキタ (*kita*) の意味については明らかにしえなかった。

そこで、この写真の耕地のうちのひとつを例にとって具体的にキタ・チャクラおよびバンダ・チャクラの耕地の特徴についてみていこう。図9はこの写真のうちのあるミスティが所有する耕地の実測図である。この耕地は平均傾斜約15度の東に面した斜面にあり、周囲には高さ1メートルから1メートル半、幅50センチメートルほどの石垣がめぐらされている。

耕地の左右に小流がみられるが、これはまったく利用されていない。つまり、この耕地にかぎらず、マルカパタでは灌漑設備はまったくないのである。耕地についてゆくと露岩がかなりみられるほか、不規則な段差が多く、このような状態が後述するように畜力をつかった犁の利用を困難にしているものとおもわれる。また、アンデネス（階段耕地）とはいうものの、石垣を積んで階段状になっているところはわずかで、それはきわめて段差の大きい部分（1.5～2メートルくらい）にかぎられる。

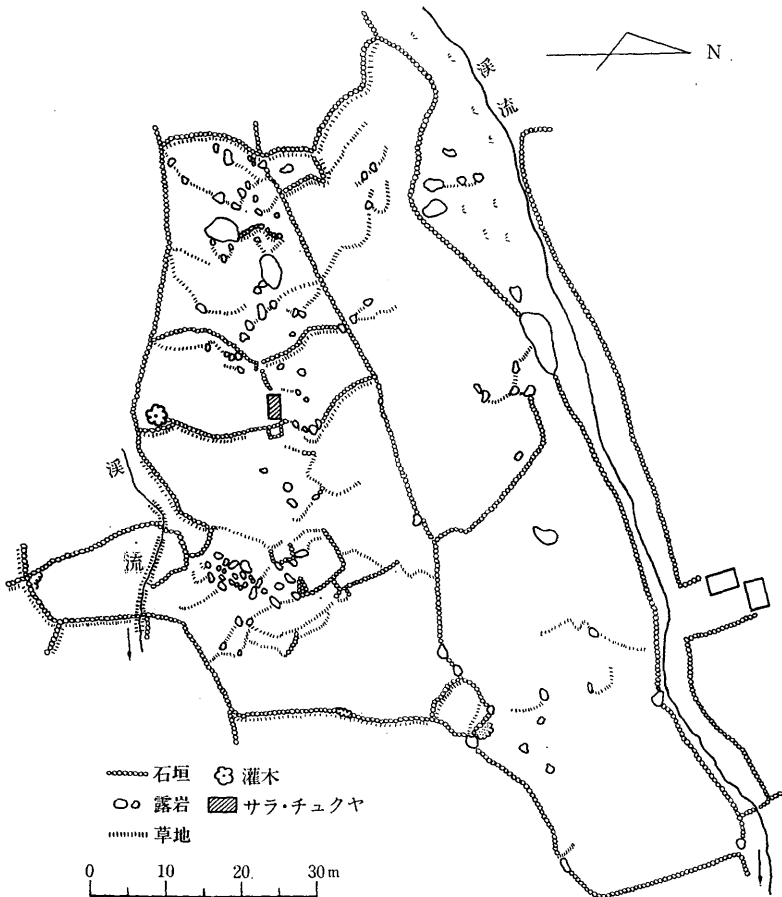


図9 キタ・チャクラの耕地

ほとんどは自然の傾斜のまま、段差になっている部分だけ、雑草が刈り残された状態になっており、一見きわめて粗雑な階段耕地のようにみえる。しかし、これは収穫後の耕地での家畜放牧のためである、と解される。

図の左側中央にはサラ・チュクヤ (sara chuklla) とよばれるトウモロコシの出作り小屋がみられる。サラ・チュクヤについては後述するが、とにかくこの小屋の存在が、この耕地がかつてトウモロコシのバンダ・チャクラであったことを示すものであり、そのときは東西に走る三本の石垣はなかった。また、この耕地を所有するミスティによれば、この耕地の一部はインディオから買ったものであるという。したがって、中央の石垣および右側耕地の中央部を斜めに区切っている石垣はかつての耕地の境界を示すものであるのかもしれない。

いずれにしてもキタ・チャクラの耕地はバンダ・チャクラのそれとは異なりかなり自由に売買されている。そのため、プエブロ・マルカパタにちかく、また東むきの比較的ゆるい斜面に位置する写真のキタ・チャクラは、ほとんど経済力のあるミスティが所有するものとなっている。また、一部にオコンガテやハトハなどのマルカパタ以外に居住するミスティが所有する耕地もある。このような不在地主の耕地はマルカパタの人間が借りうけて耕作し、収穫物を折半するという方法がとられている。

キタ・チャクラの耕地で栽培されるものについてみるとトウモロコシ、バレイショのほか、キャベツ、タマネギ、ラカチャ、ソラマメ、カボチャなど雑多であるが、もっとも栽培面積の大きいものはトウモロコシとバレイショである。そして、これらはそれぞれ、早生のトウモロコシ、早生のバレイショを意味するミシュカ・サラ (mishka sara)、ミシュカ・パパ (mishka papa) とよばれ、このことからキタ・チャクラはしばしばミシュカ・チャクラともよばれる。

しかし、キタ・チャクラで栽培されるトウモロコシとバレイショは特別な早生の品種ではなく、栽培時期をかえることによってバンダ・チャクラで栽培されるものより収穫時期を早めているのである。すなわち、バンダ・チャクラのトウモロコシ (jatun sara: ハトゥン・サラ) やバレイショが9月頃から11月にかけて播種されるのに対し、ミシュカは6月から7月に播種される。その結果、ミシュカはバンダ・チャクラのものより2～3カ月はやく収穫できる (表6)。

これは、ミシュカのトウモロコシやバレイショが特別な用途をもっているからである。つまり、ミシュカのトウモロコシは例年2月から3月にかけて催されるカーニバル (carnaval) の祭につかわれる。また、ミシュカのバレイショはもっぱら換金用とされる。ミシュカ・パパが収穫される1～2月は、バンダ・チャクラの収穫前にあた

り、もっともバレイショが不足する時期になっているからである。

バンダ・チャクラ

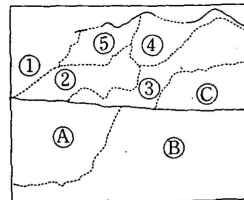
キタ・チャクラの耕地は、マルカパタ全体の耕地面積からみればごくわずかで、あとはすべてバンダ・チャクラである。したがって、バンダ・チャクラで栽培される作物が日常生活での食料のほとんどを供給しているのである。また、キタ・チャクラは、各世帯ごとに、個別に利用する、いわば私的な耕地であったのに対し、バンダ・チャクラはコムニダの耕地とでもいうべき性格のものである。つまり、キタ・チャクラの耕地はその管理、運営がまったく個人にまかせられている。いっぽう、バンダ・チャクラはその耕地の周囲の垣根の修復がコムニダの共同作業によっておこなわれるほか、播種や収穫の期日がアサンプレアで決定されるなど、耕地の管理、運営にコムニダの規制がみられるのである。

さて、写真7は、さきの図5にも示した、プエブロ・マルカパタから谷ひとつへだてた南側の山腹斜面に展開するアンデネスの一部であるが、この斜面の耕地のほとんどはサワンカイのコムニダのバンダ・チャクラである。そして、この写真の中央の細



写真7 サワンカイのバンダ・チャクラ

この写真のなかで、図の④にあたるところがサワンカイのトウモロコシのバンダ・チャクラ、⑧はマルカパタ・コヤナのトウモロコシのバンダ・チャクラ、⑨はマルカパタ・コヤナのキタ・チャクラを示す。①～⑤は、サワンカイのバレイショのバンダ・チャクラの5つのムユである



い山道から上部は、すべてマワイのバレイシヨ耕地であり、下部はトウモロコシ耕地となっている。これらの耕地は、中央の山道にそった部分などの耕地周辺部のみ石垣やトゲのある枯木などで囲われている。

また、マワイのバンダ・チャクラの耕地は、ムユ (muyu) ないしはセクトール (sector) とよばれるほぼ等しい面積をもつ5つの区画にわけられている。後述するように、一般にバレイシヨ耕地は1年耕作したあと数年間休閑されるが、ここでは1年耕作、4年休閑のローテーションがとられているのである。これらの境界も、崖や急峻な尾根などの地形的特徴を利用できる場所以外は、やはり石垣やブッシュを積み、家畜の侵入を防ぐように工夫されている。ときに道が、この耕地を横切っていることがあるが、その場合は、そこに一時的なひらき戸 (tranga) をつくる。

ところで、さきにトウモロコシとバレイシヨの栽培高度域が、海拔3,100メートルあたりではっきりわかれることを指摘したが、これはじつはバンダ・チャクラの分布高度域を示している。つまり、集落周辺のキタ・チャクラでわずかに栽培されるものをのぞけば、マルカパタではトウモロコシ、バレイシヨはすべてそれぞれ専用のバンダ・チャクラで栽培される。そして、海拔3,100メートル以上の耕地はすべてバレイシヨ用のバンダ・チャクラであり、それより低いところはすべてトウモロコシ用のバンダ・チャクラとなっているのである。

トウモロコシのバンダ・チャクラはヤクタ・サラとワリ・サラができる海拔3,100メートルから2,400メートルあたりまでに集中している。そこは各コムニダの領域の最下部に位置するところで、南むきの斜面はさきにみたように寒さのため耕地として利用できないが、それ以外の斜面はすべてトウモロコシのバンダ・チャクラとなっている (図6)。

コムニダごとにみてゆくと、サワンカイのバンダ・チャクラは、写真9に示したプエプロ・マルカパタと谷ひとつへだてた北面の斜面下部に集中している。この斜面は、チュンピ川とコヤスーヨ川が合流するユンカワロ (海拔約2,600メートル) あたりまでつづき、サワンカイのトウモロコシのバンダ・チャクラもそのちかくまで連続する。ただし、このうちコスコウーノ (Qoscouno) とよばれる小流から西側はマルカパタコヤナのバンダ・チャクラである。

このように、異なるコムニダに属しているバンダ・チャクラが境界を接しているのはマルカパタでは例外的で、一般的には谷によって境界がへだてられている。マルカパタ・コヤナのバンダ・チャクラの大半は、さきに述べたプエプロ・マルカパタとロス・バーニョスのあいだにみられたキタ・チャクラの上部にあり、以前は現在キタ・

チャクラとなっている耕地を含めて、本来ひとつのバンダ・チャクラであった。

つぎに、パイカのコムニダについてみると、その耕地はすべてユンカワロとコチャの中間地帯のマルカパタ川左岸、一般にカチワ (Kachiwa) とよばれるところに集中している (写真8)。そこは、ほぼ東西に走る尾根が北東方向に屈曲しているところで、この尾根からマルカパタ川につづく、やや東むきの斜面である。また、コヤスーヨのコムニダのトウモロコシ耕地は、このカチワのほぼ対岸の斜面にあたる場所である。

このように、マルカパタでは、各コムニダごとに、その領域の最下部に、トウモロコシ耕地が位置しているため、高地部に居住地をもつインディオたちは、トウモロコシを耕作するためにここまでおりてくるのである。具体的にそれを見てみることにしよう。写真9は、さきに示した写真7の一部で、ちょうどマルカパタ・コヤナとサワンカイのバンダ・チャクラが接している部分である。中央の小流が、このふたつのバンダ・チャクラを東西にわけているコスコウーノである。また、耕地内に白い点としてみえるものは、トウモロコシの出作り小屋サラ・チュクヤである。

サラ・チュクヤの構造やその機能については、後に詳しく述べるとして、ここではサラ・チュクヤを指標に、バンダ・チャクラ内の耕地所有者の居住地を概観してみよう。各耕地の所有者ごとに、それぞれの耕地内に、サラ・チュクヤを所有しているため、その小屋の所有者がわかれば、どの村から、ひいてはどのコムニダから、この耕地にトウモロコシ耕作に来ているか、あきらかになるのである。

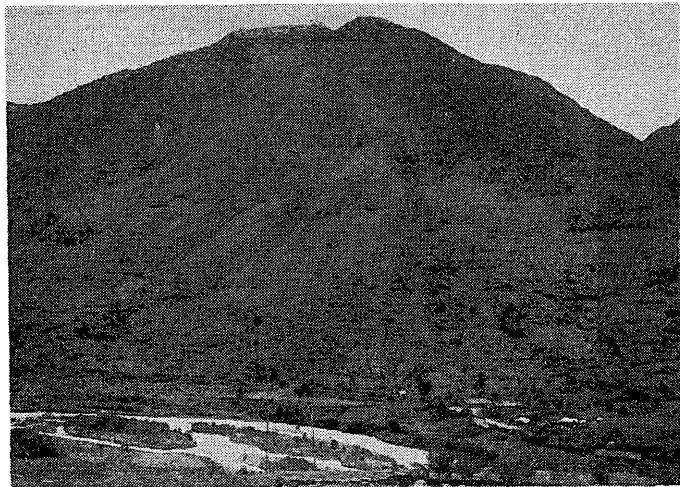


写真8 カチワにあるパイカのトウモロコシ耕地
手前の集落はコチャ (海拔2,600メートル)

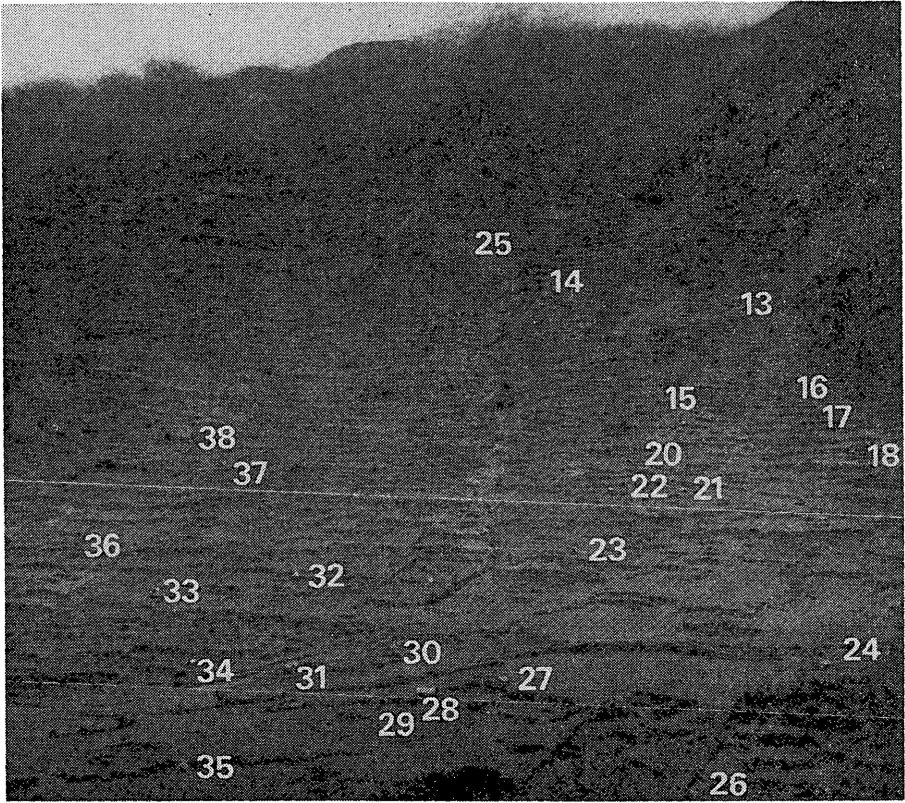


写真9 トウモロコシのパンダ・チャクラとサラ・チュクヤ

表5は、写真9にみられるサラ・チュクヤの番号、所有者、居住している村、所属するコムニダを示したものである。この表から、コスコーノの小流を境に、左側に位置するサラ・チュクヤはNo. 34をのぞいて、すべてサワンカイのコムニダに所属する村人のものであり、その反対側はほとんどマルカパタ・コヤナのコムニダに属している村人のものであることがわかる。

マルカパタ・コヤナの13のサラ・チュクヤの所有者の居住地の内訳は、ラッコが6、カチカチ (Cachicachi)、カチ (Cachi)、チュンピ (Chumpi)、チュンピパタ (Chumpipata)、マルカラニ (Marcarani)、ウイスカチャニ (Wiscachani)、プエプロ・マルカパタがそれぞれ1である。これらは、いずれもチュンピ川の2本の支流域に散在している村で、とくにマルカラニやウイスカチャニはチュンピ川の源頭、海拔4,300メートルあまりの高地に位置する集落である(図11)。サワンカイのコムニダに所属する12のサラ・チュクヤの所有者の居住地はカンチャパタ (Canchapata) が6、マユバンバ (Mayubammba) が5、プエプロ・マルカパタが1である。マユバンバの標高に

表5 サラ・チュクヤの所有主と居住地

サラチュクヤ番	所有主	居住地	所属コムニダ
13	P. S.	Lacco	Marcapata Collana
14	M. L.	Cachicachi	//
15	C. H.	Lacco	//
16	J. M.	Chumpi	//
17	J. M.	Marcarani	//
18	S. P.	Marcapata*	//
20	J. S.	Lacco	//
21	D. S.	Canchapata	Sawancay
22	M. M.	Lacco	Marcapata Collana
23	L. C.	//	//
24	P. C.	Chumpipata	//
25	A. G.	Marcapata*	Sawancay
26	G. Q.	Canchapata	//
27	S. F.	//	//
28	A. K.	Mayubamba	//
29	P. C.	Lacco	Marcapata Collana
30	V. K.	Mayubamba	Sawancay
31	F. P.	Canchapata	//
32	Q. R.	//	//
33	T. S.	//	//
34	F. E.	Wiscachani	Marcapata Collana
35	A. R.	Cachi	//
36	A. F.	Mayubamba	Sawancay
37	R. Q.	//	//
38	R. R.	//	//

*印は、ミスティ

については不明であるが、カンチャパタも海拔3,700メートルの高地に位置する村である。

これらのことから、各コムニダのバンダ・チャクラには、それぞれのコムニダの各地の村から、ときには標高差1,000メートル以上の距離を下って、トウモロコシ耕作にやってきていることがわかる。なお、バレイショのバンダ・チャクラの分布については、さきにサワンカイの例でみたように、それがさらにいくつかの区画にわけられるなど、すこし複雑なため、後で具体例を示して報告することにしたい。

3. 農 耕 技 術

前節で述べたように、主作物のトウモロコシとバレイショはともに共有地的性格をもつ、それぞれのコムニダのバンダ・チャクラで栽培されている。したがって以下に、

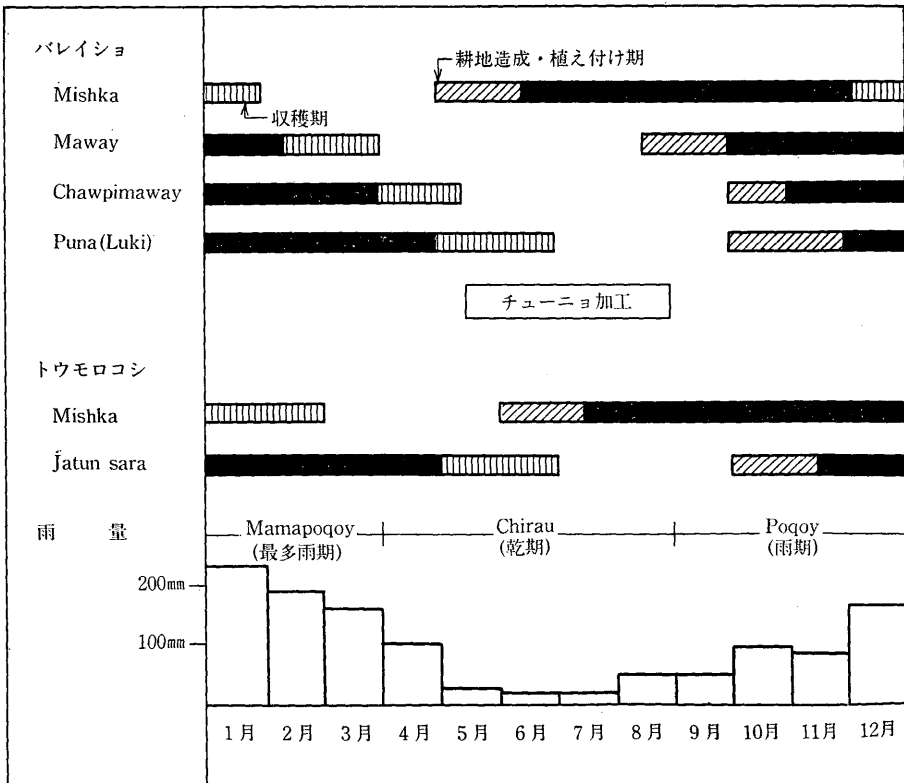
マルカパタ・コヤナのコムニダを中心に、バンダ・チャクラでのトウモロコシとバレイシヨの農耕技術について記述してゆく。

1) 農 作 業 暦

表6はマルカパタにおける年間の農作業暦とオヤチュアの月平均の雨量を示したものである。この表を全体として眺めるとミシュカのトウモロコシとバレイシヨ以外はすべて9月から10月ころの雨期(poqoy)はじめに播種、植え付けがおこなわれる。とくに10月から11月はマワイおよびチャウピ・マワイのバレイシヨの植え付けをすませた後、一時的にトウモロコシ耕地に移り住み、そこで播種をおこなう。それが終了すると今度は高地部でプーナヤルキのバレイシヨの植え付けを行うなど、1年のうちでもっとも忙しい時期になっている。

播種・植え付けに対し、収穫はミシュカをも含めると1月から6月の長い期間にわたる。とくにバレイシヨは1〜2カ月ごとにすくなくとも4回収穫され、1年を通じ

表6 トウモロコシとバレイシヨの農作業暦



てバレイショの供給が可能のように工夫されている。表には記していないが、プーナのバンダ・チャクラの一部で栽培されるオカ、オユコ、イサーニョなども、プーナのバレイショとほぼ同時期に植え付け、収穫がおこなわれる。また、一般にチューニョとよばれるバレイショやオカなどの凍結乾燥イモの加工がこれらのイモ類の収穫後、6月～8月の乾期におこなわれる。

ところで、ミシュカのトウモロコシとバレイショは乾期のあいだに播種・植え付けがおこなわれる。これは、さきに述べたように儀礼や換金用のため、収穫時期を早める工夫である。しかし、灌漑設備のないマルカパタではときに降雨量の不足のために、まったく収穫物の得られないこともあり、ミシュカの栽培はきわめてリスクの大きいものとなっている。したがって、天候を予測するための星占いがおこなわれている。その詳細はあきらかではないが6月24日のサン・ファン (San Juan) の日に、北天に見えるコト (ccoto) とよばれる星の状態をみて決定されるという。このほか、このコトによる星占いは、収穫の豊凶や凍結乾燥イモの加工日を知るためにもおこなわれる。

とにかく、マルカパタでは気温の年較差が小さいため、もっぱら降雨量の変動によって農作業暦はつくられているのである。

2) トウモロコシの栽培

前年に収穫されたトウモロコシはキク科の植物、スンチュ (sunchu, *Viguinera* sp.) の茎で編んだ筒状の簀の容器、タッケ (take) にいれて保存されている。播種にさいしては、まずトウモロコシ粒を穂軸からはがす作業、ムフチャイ (mujuchay) がおこなわれる (写真10)。トウモロコシの果穂全体はムフ (muju) といわれるが、この果穂の上部 (uma muju) と下部 (ura muju) は発芽力が劣るとかんがえられており、種子につかわれるのは果穂の中央部 (chawpi muju) だけである。したがって、両手をつかって穂軸からトウモロコシ粒をはがしながら、播種用と播種には適さないもののふたつにわけて



写真10 播種前にトウモロコシ粒を穂軸からはがす作業、ムフチャイがおこなわれる

ゆく。後者は家畜の飼料とされる。粒をはがした芯 (corunta) は捨てないでトウモロコシ耕地に埋めるか、または岩蔭などの窪地に置かなければならない、とされる。そうしないとトウモロコシに病気が発生したり、ときに降霜をまねくことになるといわれる。

トウモロコシの耕地は、さきに述べたように、すべて海拔3,100メートル以下のところにあり、いっぽう大半の集落は海拔3,500メートルから4,000メートルあまりのところに位置している。したがって、トウモロコシ耕地への移動に半日以上かかることも珍しくない。また、耕地の耕起、播種作業、とくに収穫作業は一週間ちかく要するため、家族のほとんどが一時期集落を離れ、トウモロコシ耕地にある出作り小屋、サラ・チュクヤに移りすむ (写真11)。なお、家畜をもっている家族は、運搬用のリヤマ以外はその家畜の管理を老人、親族、知人などに依頼してゆく。

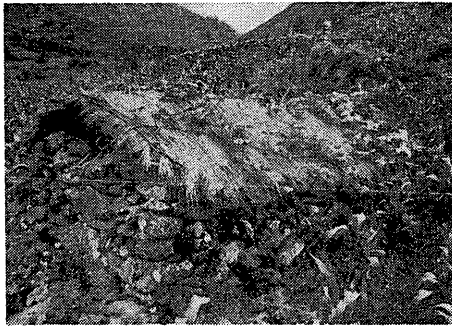


写真11 トウモロコシの出作り小屋、サラ・チュクヤ

サラ・チュクヤは、図10のように周囲は石を積みあげた壁でできており、屋根はイチユの草でふいただけの簡単なものである。しかし、内部には炉がしつらえてあり、また調理用の石臼、バタン (batán) もあって、一応の食事の準備もできるようになっている。したがって、ここに降りすむときは、プーナから屋根をふくためのイチユや調理道具などをもって下る。

播種にさきがけて、まず耕地の整地作業、アルチャクイ (alchacuy) がおこなわれる。トウモロコシの耕地は毎年耕作され、前年の収穫後、半年ほど放置されていたけなので、雑草も耕地全面をおおうことはあまりなく、雑草の刈りとりにつかわれる道具も鎌、キトゥチ (kituchi) が主となる (写真12)。なお、ワリ・サラやユンカ・サラの場合は高度が低いので、雑草は草

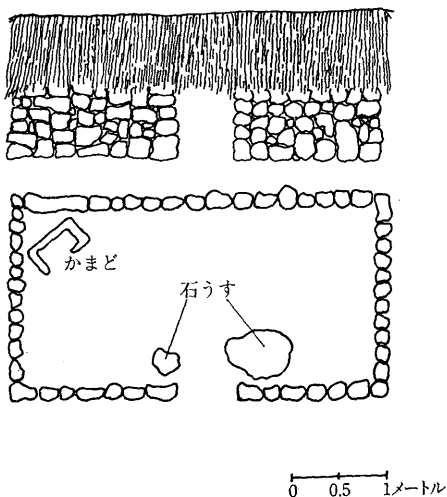


図10 サラ・チュクヤの構造

本類だけでなく、灌木類も混じっているため、山刀 (machete) で刈り払われる。こうして、刈りとられた雑草は数日乾燥させた後、耕地のなか、数カ所に集めて燃やす。この灰は、肥料として大きな役割をはたすとかんがえられている。

耕地の耕起作業は、チャキ・タクヤ (chaqui tacla) とよばれる伝統的な踏み鋤がつかわれる。現在アンデスでひろくみられる畜力をつかった犁はまったくみられない。この理由として、マルカパタではほとんど平坦地がなく、急な斜面に耕地があり、しかもその耕地は幅のせまいアンデネス(階段耕地)となっており、踏み鋤のほうが有効であるためであるとかんがえられる。

アンデスには、現在もいくつかのタイプのチャキ・タクヤがみられるが、マルカパタのそれはすこし小型のものである(写真13)。長さ約1メートル程度の太い木の棒、カルサドル (calzador) のさき、鉄製の刃、ルラナ (rurana) をはめこみ、下部に

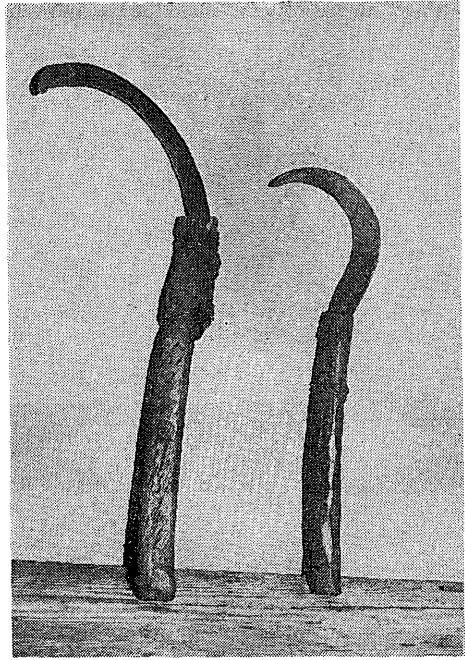


写真12 除草用の鎌，キトツチ

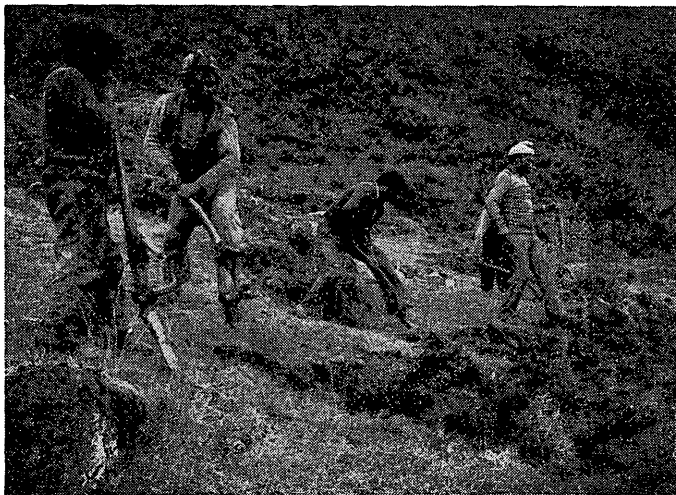


写真13 踏み鋤をつかって、おこなわれる休閒地の耕起作業

は足をのせて踏むための横木、タキルポ (taquillpo) と木製の握り、クモ (kumo) をつけたものである。この使用法は全体重が鋤の先端にかかるように斜めに土中につきさし、つぎに両手でにぎりの上端を手前にひきさげて耕起する。

実際の作業は、チャキ・タクヤをつかって土をおこす男とその土塊をウスピ (uspi) とよばれる木づち状のもので砕く女がペアーとなっておこなう (写真14)。この男女のペアーが、通常一列になって、耕地の斜面下部から男は後退しながら、女は前進しながら、耕地を耕す。このあと、約50センチメートル間隔に、ふかさ20センチメートルほどの溝、ワチョ (wacho) をつくり、そこにトウモロコシの種子をまく。

この耕地の耕起作業では、しばしば親族内での労働の交換、アイニ (ayni) がみられる。たとえば、ある親族に1日この耕起作業を手伝ってもらった場合、翌日はその世帯の耕起作業を手伝うというように、等量の労働力の交換がおこなわれる。これは、トウモロコシ耕地での作業が一般に集落を離れ、限られた時間内で終らなければならないための共同労働であるとおもわれる。しかし、このアイニはトウモロコシ耕地の耕起作業にかぎらず収穫作業やバレイショ栽培でもみられるとされており、親族間の互酬的な関係をよく示すものといえるであろう。

このアイニが、主としてインディオ間でおこなわれるのに対し、ミスティとインディオ間ではしばしばミンカ (minka) とよばれる協力関係がみられる。アイニが労働と労働との交換であるとする、ミンカは労働と物との交換である。すなわち、ミスティの農作業に対するインディオの労働の提供に対して、ミスティは食事やココア、タ



写真14 男女がペアーとなっておこなうトウモロコシ耕地の耕起作業。
なお、これはアイニによる共同労働である

バコ、酒などを与え、労働力の不足を補う。

播種作業は種子を腰にまいた布、マンタ (manta) にいれ、片手にラウカーナ (raucana) とよばれる鋤をもって、おこなわれる (写真15)。このラウナカーナで50センチメートル間隔くらいで溝に穴を掘り、そこに3~5粒ずつ播種し、土をよせる (写真16)。1カ所に、このように多くの種子をまくのは、播種後、降雨をみてもしばらく晴天がつづくとしルウイ (siruhui) という甲虫の幼虫が幼苗を食べてしまうためだとされる。しかし、このように多く播種しても、この害虫によって、かなりの被害を受けることが普通で、そのようなところには、あらためてソラマメが播かれ、じっさいにはトウモロコシとソラマメの混植といった印象さえうけるほどである。

トウモロコシと豆類との混植は新大陸の伝統農業では広くおこなわれていることが知られている [SAUER 1950: 498-503, ほか]。Donkin によれば、この混植は耕地の休閑の必要性をちいさくするものである、という [DONKIN 1979: 2]。豆類を栽培すると根瘤バクテリアが窒素固定作用をおこなうため、土壌中の養分回復に役立つからである。マルカパタの場合も、結果的にトウモロコシと豆類の混植をしていることになり、それが連作されるトウモロコシ耕地の地力回復を助けているとおもわれる。

播種後約1カ月を経た11月頃に、1回目の溝さらい、ニャウチャスカ (ñauchaska)



写真15 ラウカーナ (左) とウスピ (右)



写真16 トウモロコシの播種作業。3~5粒ずつ播種する

をおこなう。この作業もやはりラウカーナを使い、溝のなかに、あたらしく生えてきた雑草をぬきとるとともに、畝のくずれたところの土をすくって、溝をさらうのである。マルカパタではさきにみたように灌漑設備はまったくないが、この作業は耕地の保水力をたかめる役目をはたしているものとおもわれる。

さらに1カ月を経た12月には、トウモロコシは草丈30センチメートルあまりになっているが、この時期にはコトゥスカ (kotuska) とよばれる作業がおこなわれる。施肥である。肥料は、現在化学肥料をつかうところが多くなっているが、肥料を与えないものもかなりみられる。トウモロコシの根元に施肥したあと、畝をくずして土をかぶせる。12月ころのマルカパタはもうかなり降雨量が多くなっているため、溝をつくっておく必要はないのかもしれない。

2月か、3月頃、最後の除草作業 (kachupaska) をおこなった後、6月の収穫 (sara tipiy) を迎える。なお、播種作業後の除草や施肥などの作業については家族全員が来る必要はなく、1～2人が作業にあたる。

筆者は、トウモロコシの収穫作業はまだ観察する機会を得ていないが、聞きとりによれば、それは次のようなものである。播種のときと同じように、ほとんどの家族が山を下って、サラ・チュクヤに泊りこんで収穫にあたる。収穫法は、果穂だけをもぎとって、サラ・チュクヤの周辺部で乾燥作業、テンダラスカ (tendaraska) をおこなう。トウモロコシの皮は、ティピーナ (tipina) とよばれるペーパー・ナイフ状のものではがし、天日で乾燥する。

ところで、この収穫のときは、家畜をもっている家族は、アルパカをのこして、リヤマや羊などのすべての家畜をつれてくる。そして収穫の終わったバンダ・チャクラの門をとりはずし、そこに家畜を放つといわれる。このトウモロコシ耕地は、かつては全く肥料をやらなかつたといわれ、現在も肥料を与えていないところがあることから、これは一種の刈り跡放牧ではないか、とかんがえられる。また、牧畜の側からみれば、乾期は高地の牧草が不足するときであり、このような刈り跡での放牧が牧草の不足を補うものとしての役割をはたしている、とおもわれる。まだ、これを観察していない段階で結論を下すことは控えたいが、マルカパタでの農業と牧畜との関係を知るうえできわめて興味ぶかい。

3) バレイショ耕地のローテーション

さきに、バレイショ耕地の分布について簡単にふれたが、ここではマルカパタ・コヤナを例にとって具体的にみてゆくことにしたい。マルカパタ・コヤナのバレイショ栽培耕地は、チュンピ谷上流域の海拔3,000メートルあまりから4,200メートルあた

りまでの山腹斜面に展開している。チュンピの谷は、南西につきあげている本谷とロス・バーニョスから1キロメートルほど上流のところから南につきあげる支谷からなっているため、マルカパタ・コヤナのバレイシヨ耕地はこの両方の谷に分布している。

このふたつの谷にある耕地は、基本的に同じ谷に位置する集落のバンダ・チャクラとなっている。たとえば、支谷のほうは、その上流域にラッコ、カチカチ、パリーナ(Parina)、その他の集落があるが、この谷の耕地はすべてこれらの集落のバンダ・チャクラとなっている。また、本谷にみられる耕地は、この谷に位置するトゥンコス(Tuncos)、チュンピ、チュンピパタ、ワイヤパタ(Hauayllapata)などの集落のバンダ・チャクラとなっている(図11)。

ここでは、この本谷についてみてゆくことにするが、耕地の分布や土地利用について述べるまえに、まずバレイシヨ栽培のローテーションについて、ふれておきたい。マルカパタのバンダ・チャクラでは、バレイシヨを1年耕作したあとは4年休閑するのが基本となっている。この理由のひとつは地力回復のためであるが、もうひとつ重要なのはバレイシヨの厭地現象のためである。バレイシヨも、ナス科作物の共通する特徴として、同じ耕地に連作すると翌年はきわめて収量がおちるという現象がおこる。この厭地回復には、普通4～5年は要するとされており、このためにも最少4年は休閑する必要があるとかんがえられる。したがって、バレイシヨを1年耕作したあと、次年度にこの耕地の一部をつかって、オカ、オユコ、イサーニョなどのイモ類やタルウイなどの豆類を栽培することはあるものの、バレイシヨを連作することはみられない。その結果、毎年バレイシヨを耕作するためには、すくなくとも5つの耕地が必要となる。

したがって、さきにサワンカイのバレイシヨ耕地の例でも示したように、ひとつのバンダ・チャクラをいくつかに分けて、毎年このうちのひとつの区画、ムユをつかってバレイシヨ栽培をおこなう。じっさい、1年耕作、4年休閑というバレイシヨ栽培システムをとっているマルカパタ・コヤナでは、ひとつのバンダ・チャクラのなかに5つのムユがみられる。1年耕作、6年休閑というシステムをとっているコヤスーヨでは7つのムユをもっているのである。したがって、休閑期間の短いマルカパタ・コヤナでは、ときに耕作年にあたっているムユの一部を耕作しないで、つぎの耕作年まで、つまり耕作後の10年目までの9年間休閑させて、地力回復をはかることがあり、このような耕地はとくにワルキ(walkki)と称され、大きい収穫が期待されるという。

さて、マワイのバレイシヨ耕地からみてゆくと、調査時(1978年)に耕作されていた

耕地はマンサナーヨフ (Mansanayoc) とよばれるチュンピ川左岸流域にあるムユであった (図11参照)。この対岸のマルクーヨフ (Malcuyoc) のムユの一部でオカ、オユコ、タルウイが耕作されていたほかは全て休閑していた。つまり、このマルクーヨフは2年前に、バレイショを耕作したところなのである。この谷では、マワイのバレイショは、今年チュンピ川左岸出合い付近のマンサナーヨフのムユで耕作したあと、翌年はその上部のニユクチュパタ (Ñucuchupata) のムユ、そのつぎの年は右岸にうつり、トゥコス上部のキシワラニ (Kiswarani)、つづいてトゥンコス、そして最後にトゥンコスより下部に位置するマルクーヨフのムユと毎年バレイショの耕地がうつりかわるのである。

さらに、マルカパタ・コヤナではこれら5つのバンダ・チャクラにくわえて、マワイの耕地として、ルナルナ (Runaruna)、ヤナルナ (Yanaruna) というところにふたつの共同耕地がある、とされる。これは、さきに述べた耕地だけで不足するときの予備の耕地とでもいうべきものである。

つぎにプーナのバレイショ耕地は、チュンピ谷では、海拔約3,800メートルのチュニユナ (Chuñuna) から海拔4,000メートルのワイヤパタまでの両岸に展開する。マワイと同じように、やはり5つのムヨがある。右岸のチュンピ、チュンピパタ、チャピパンパ (Chapipampa) の3つと左岸のチュニユナ、ワイヤパタである。そして、毎年このうちのひとつのムユがつかわれて、プーナのバレイショ耕作がおこなわれるのである。

ルキのバンダ・チャクラはチュンピ谷ではV字谷がおわったU字谷の草地帯に位置している。このあたりの高度はもう農耕限界にちかく、耕地の上限としては海拔4,250メートル地点である。したがって、パパ・ルキのバンダ・チャクラは海拔約4,100メートルから4,200メートルあまりのわずか100メートルほどの高度域にある。また、ルキのバンダは、マワイ、プーナのそれらとはちがって、明確なローテーション・システムはとられていない。

すなわち、マワイ、プーナでみられたような5つのムユはなく、チュンピ川の源頭のチュヨ (Chullo) とハンカラヤ (Jancallaya) とよばれるところに位置するふたつのバンダ・チャクラがつかわれる。1年耕作、4年休閑という基本パターンはかわりないが、このふたつのバンダ・チャクラの耕地を適当につかって耕作している。というのは、ルキ帯で栽培されるバレイショはさきにみたように、とくに耐寒性のつよいものであるが、それでも時にはげしい降雪や低温が長くつづくと全滅することがあり、その栽培はかなりリスクがともなう。したがって、ルキのバレイショは、年によって

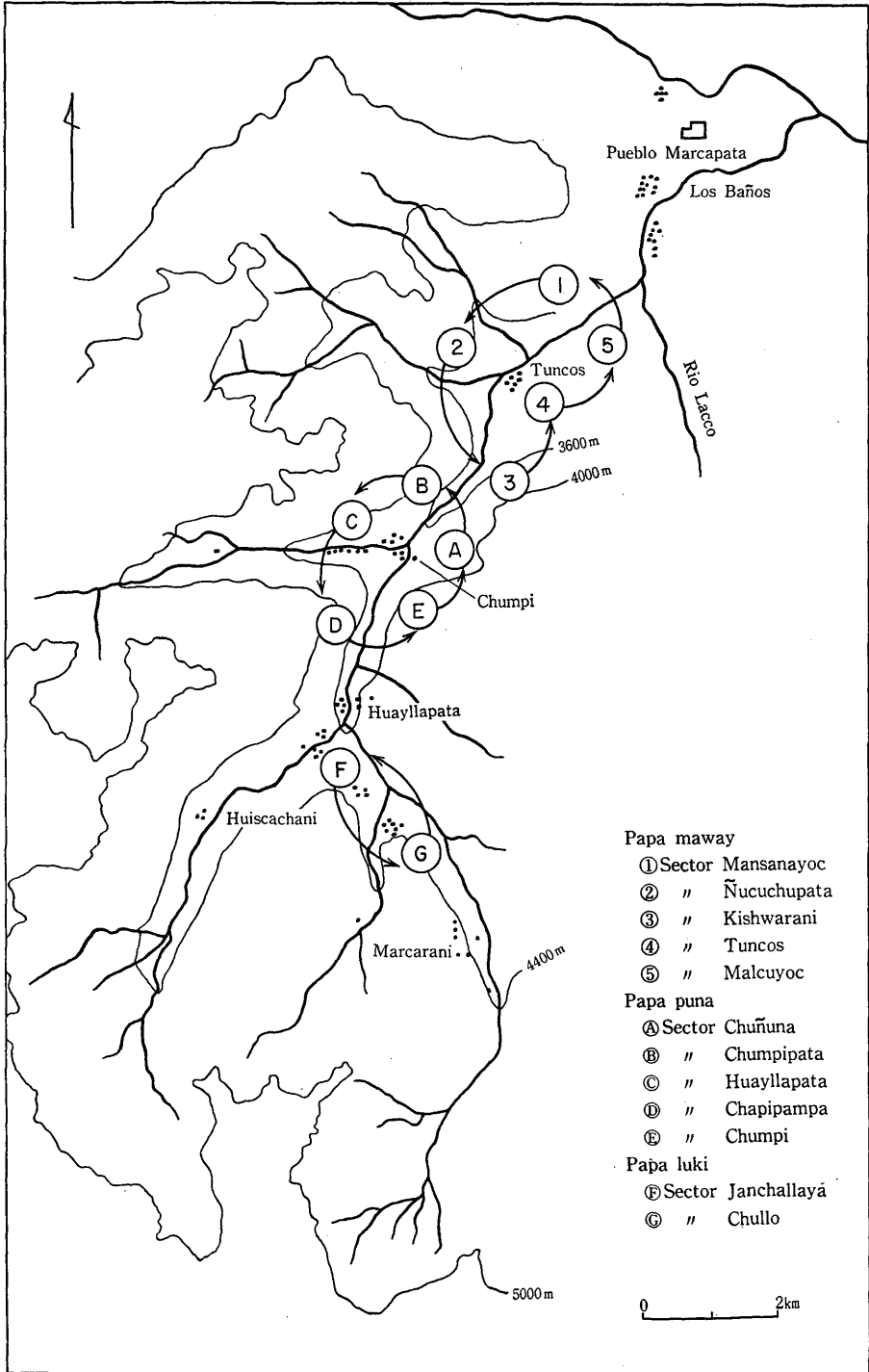


図11 チュンピ川流域のパレイシヨ耕地とローテーション

耕作しない世帯もあり、マワイやプーナのバレイシヨとくらべると毎年耕作される耕地面積がかなり小さいのである。

4) バレイシヨの栽培

種イモはいずれも前年の収穫後プーナのゾーンで貯蔵されたパパ・プーナがつかわれる。「papa puna は sana (健康)である」といわれるように、マワイやミシュカなどのような低いところで栽培されたバレイシヨは病気に犯されていることが多いからであるとされる。じっさい、ミシュカやマワイのバレイシヨにはウイルスに犯されたとおもわれるものがかかなりみうけられたし、それにたいする対策も次第に重要な問題となりつつある。

また、種イモをプーナに貯蔵するのは低温によって貯蔵中の発芽を防ぐためでもある。低いところで貯蔵した場合、播種前に発芽してしまい、発芽力の劣化をひきおこすのみでなく、この発芽した芽をとる作業、カチュ・ルスカ (kachu luska) が加わるからである。

種イモはつい最近までプーナの耕地の横に石垣を積んでつくられた貯蔵穴、フクナ (fukuna) に貯蔵していた。このフクナは随所にみられるが貯蔵中のバレイシヨがしばしば盗まれたために、つかわれなくなった、といわれている。現在は、家屋敷地内の一隅に貯蔵するのが普通である。この場合も、できるだけ低温下に貯蔵することがのぞましく、家屋敷地内の一隅にわらを敷き、その上にバレイシヨ、そしてまたその上をイチユでおおい、石をのせる。

バレイシヨ耕地はすくなくとも4年の休閑をおこなうため、新しく播種するところはいずれも雑草でおおわれている。とくに、マワイの耕地はプーナにくらべて標高が低いため、小灌木をふくむ雑草の繁茂がはげしい。とくに、グラマ (grama, *Cynodon* sp.) とよばれる雑草は繁殖力がつよく、耕地を完全におおいつくすため、休閑地の耕起作業の最大の障害となっている。このグラマは、アンデスにはもともとなかったもので、マルカパタでは自動車道路開通後にみられるようになったといわれる。現在、このグラマはマルカパタではマワイ帯のみで、プーナ帯ではまだみられない。とにかく、マワイの休閑地でこのグラマがみられるようになってから、マワイのバレイシヨの栽培方法は、ルキやプーナのものとは若干ちがうようになったとされる。すなわち、マワイのバレイシヨ栽培では、植え付け前に、ユハスカ (yujaska) とよばれる休閑地の耕起作業が追加されたのである。

ユハスカは、基本的に、さきに述べたトウモロコシ耕地の耕起作業とおなじで、さきの写真16にみたようにチャキ・タクヤをつかって、土地をおこす。ただし、トウモ

ロコシの耕地は毎年つかわれているのに対し、バレイシヨの場合は数年休閑し、またグラマも密生しているため、耕地はきわめてかたくなっている。したがって、雨期があける前の3月ころ、降雨で比較的土壌がやわらかくなっているときに、ユハスカをおこなう。おこされた土塊は、その後につづく乾期には乾燥し、雑草を枯死させるのである。

マワイ用の耕地では播種前に再度この土地の耕起、整地作業をおこなう。つまり、8月か9月頃には、一度耕起された土地に、再度雑草、とくにグラマが生えていることがおおい。したがって、上記の作業をくりかえした後、雑草を集め、数日乾燥したあと、燃やす(写真17)。この灰は肥料として役立つといわれており、燃やすときも一カ所ではなく、数カ所で、できるだけ広い範囲に、この灰が散布できるように配慮してある。

バレイシヨの植え付け前に、もうひとつ大きな作業が残されている。バンダ・チャクラの周囲にめぐらされている垣根、ピルカの修復である(写真18)。トウモロコシ耕地の場合は、毎年使用されるため、その修復も一部にとどまる。しかし、バレイシヨ耕地は数年放置されていたため、崩壊している部分も多い。したがって、この垣根の修復作業、ピルカスカ(pirkaska)は、アサンプレアで日程や役割を決めて、コムニダの共同作業、ファイナとしておこなわれる。道路に面した部分には石垣を積みあげ、トゲのあるブッシュなどを置いて家畜の侵入を防ぐ。また、この耕地が道を横切っている場合などは、石を積み上げて、この道を遮断し、そこには先述したひらき戸



写真17 マワイのバレイシヨ耕地の整地作業。刈りとった雑草は乾燥後耕地内で燃やす



写真18 耕地の周囲に石垣を積みあげる作業、ピルカスカ。これはキタ・チャクラでの作業である

をつくるか、人なら通過できるトゲのある枯木などを置いておく。なお、ミシュカのバレイシヨ耕地のピルカスカでは、さきに述べたミンカなどの関係を利用して、世帯

ごとに個別におこなう。

バンダ・チャクラは共同耕地とはいっても、各世帯が耕作する土地はきまっており、露岩、段状になったところで境界がきめられている。この境界内で、家族単位で作業はおこなわれる。種イモは、さきに述べたように、プーナで貯蔵してあるため、リヤマ、馬などをつかって耕地まで運びおろし、イモの大きいものは半分に切ってつかう（写真19）。また、プーナではこれと同時に、リヤマ、アルパカ、ヒツジなどの家畜の糞 (wañu) も肥料として耕地に運びこまれる。肥料としては、ヒツジの糞のほかリヤマやアルパカの糞を混ぜたものをつかう。これらの糞は、ワニユ・ワシ (wañu wasi) とよばれ



写真19 種イモづくりの作業。大きいイモは半分に切ってつかう

る肥料小屋に貯蔵してある。自分たちでつかうばかりでなく、家畜をもたない人たちに売ったり、品物と交換する。

なお、施肥の必要があるのは、プーナおよびルキのバレイシヨで、マワイは肥料を与えない。その理由は、マワイの休閑地には、グラマが繁茂するが、これを燃した灰が肥料としての役割をはたしているから、といわれる。

バレイシヨの播種作業もやはりチャキ・タクヤがつかわれる。耕地の斜面下部から上部にむかって、50センチ・メートルくらいの間隔でチャキ・タクヤで穴をあけてゆく。この列と列との間の距離は80センチ・メートルほどである。村人の話では、この播種作業は、チャキ・タクヤをつかう男、イモを植えつける女、肥料を施す者の計3人でおこなうという。しかし、そのようなたてまえどおりのものは一度もみられず、一般に、男が耕地に穴をあけてゆき、それを追うような形で女がイモを2コか3コ、この穴にいれ、土をかぶせる(写真20)。施肥(wañu chulay)は、この作業の2~3日後から1カ月間くらいのあいだにおこなわれる。

播種後1カ月くらいで、バレイシヨは土中からすこし芽をだしてくるが、この段階でプーナのバレイシヨの場合は植えつけた列の横に溝を掘る。やはり、チャキ・タクヤをつかって、深さ20センチ・メートル、幅30センチ・メートルくらいの溝をつけ、掘りおとした土は発芽したバレイシヨのまわりに盛り土される(写真21)。トウモロコシの場合とは反対に、イモの部分が侵水すると腐ったり、よいイモができないからである、とされる。

このあと、これらのバレイシヨ耕地は、2~3回除草され、3月ころから5月ごろにかけてマワイ、チャウピ・マワイ、プーナ、ルキの順でつぎつぎに収穫される。ただし、これらのバレイシヨは、その年の降雨量や気温などによって収穫までの期間が異なるため、耕地の一部のさぐり掘り、ピティキニャ・ママ(pitikiña mama)の作業の後、収穫日が決められる。収穫作業は、家族単位でおこなわれるが、ト



写真20 プーナのバレイシヨの播種作業



写真21 バレイシヨは発芽後、排水のための溝がつくられる

ウモロコシの収穫の場合とはことなり、収穫されたイモはその日のうちにリヤマや馬などで運搬、集落にもちかえられる。

バレイシヨ耕地にも、トウモロコシの出作り小屋、サラ・チュクヤに類似したパパ

・チュクヤ (papa chuklla) がみられることもあるが、この小屋に寝泊りすることはむしろまれで、昼食や降雨のときに利用される程度である(写真22)。また、パパ・チュクヤをもたない家族は、ビニールなどをつかった一時的な小屋をつくる。このようなトウモロコシとバレイシヨの収穫におけるちがいは、バレイシヨの収穫の方が容易で、またトウモロコシのように収穫後乾燥させる必要もないなどのためであるが、さらに耕地と集落との距離も関係しているであろう。すなわち、バレイシヨ耕地は、一般に集落からちかく、日帰りでも十分に作業の可能な距離に位置していることを示すものであろう。

イモ類について最後にふれておかな

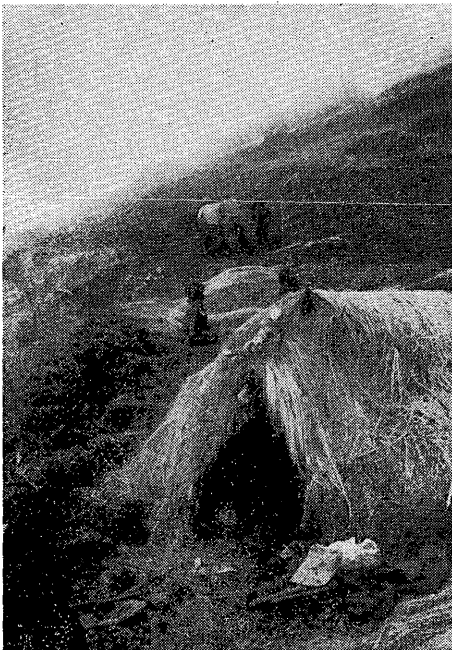


写真22 バレイシヨ収穫のための作業小屋、
パパ・チュクヤ

ければならないのは、凍結乾燥イモの加工である。さきのルキとよばれるバレイショは、苦味がつよくそのままでは食用とならないのであるが、それはこの凍結乾燥イモに加工してはじめて食用となるのである。ルキのほかにも、収穫されたバレイショの一部、オカのほとんどが凍結乾燥イモに加工され、重要な貯蔵食品となる。

凍結乾燥イモの加工は、バレイショやオカの収穫終了後の乾期、とくに6月から7月にかけて、海拔4,000メートル前後の高地部でおこなわれる。この時期の高地部は、1年を通じてもっとも気温の日較差が大きく、最低気温は氷点下になり、また湿度ももっともひくい(表1参照)。凍結乾燥イモは、このような気象条件を利用して加工されるため、この時期に各コムニダの高地部、とくにルキのバレイショの栽培ゾーンあたりでおこなわれる。それは、マルカパタ・コヤナでは、チュンピ(Chumpi)やラッコ(Lacco)の上部地帯、プイカではコリニ(Coline)から上部の高地部である。

マルカパタにおける凍結乾燥イモづくりは筆者はまだその一部を観察したにすぎないが、その加工のプロセスは村人の話によれば、つぎのようなものである。バレイショの凍結乾燥イモにはチューニョ(chuño)とよばれるものとモラヤ(moraya)のふたつがある。チューニョは野天にバレイショを1~2日放置し、日中の気温上昇と夜間の低温を利用して、イモの凍結、融解を1~2回くりかえし、やわらかくなったイモを足で踏んで脱水、乾燥させたものである。

モラヤはチューニョづくりのプロセスのうちで足で踏んで脱水したあと、これを水に約15日つけて水でさらし、乾燥させたものである。この水さらしは流水の方がよいため、小川の川岸ちかくに石で仕切った、バレイショの水さらし用の穴、モラヤ・トコ(moraya toko)がつくられる。この穴にイチュをしき、バレイショをいれたあと、さらにイチュでおおい、水に流されないよう石をのせて置く。チューニョ、モラヤの材料とされるバレイショの品種について詳しい情報は得られなかったが、すくなくとも苦味のあるバレイショ、ルキはすべてモラヤに加工される。

オカの凍結乾燥イモ、カーヤ(caya)もその加工法は基本的にモラヤとおなじである。ただ、水につけておく期間が一般に2カ月ときわめて長いため、世帯ごとに、毎年イモを水につけるための穴、カーヤ・トコ(caya toko)がもうけられている。直径、深さとも1メートル前後で、小川から小流がひかれ、穴の水がつねにかわるように工夫されている(写真23)。

このようにして加工された凍結乾燥イモは干肉(charque)などとともに、貯蔵食を意味するワタ・ミフイ(wata mijuy)と称され、マルカパタの農牧民にとって不可欠なものとなっている。じっさい、オカなどはそのままの状態ではくさりやすいが、カ



写真23 オカを水さらしするための穴，カーヤ・トコ

ーヤにするとすくなくとも1年はもつといわれる。また、バレイショもプエプロ・マルカパタなどの比較的低いところではすぐに芽がでたりして、調理に好ましくない状態になりやすいが、凍結乾燥イモにすれば長期間保存に耐えるうえ、乾燥しているため、もとのイモにくらべかなり軽く、輸送にも都合がよい。したがって、貯蔵食品としてだけでなく交換の品としても、しばしばつかわれるのである。

さらに、高度差利用という観点からみた場合、モラヤの加工法の存在はルキという苦味はあるものの耐寒性がよく、ふつうのバレイショでは生育不可能な高地まで利用可能にした点で、大きな役割をはたしていると言えるだ

ろう。なお、これらの凍結乾燥イモの加工法、その意義については別稿で報告しているので、くわしくはそれを参照いただきたい [山本 1976]。

以上、トウモロコシとバレイショの栽培技術を中心にみてきたが、それはマルカパタの自然環境にきわめて適応したものであり、これらの作物の栽培への労働投下量を最小にするものであるといえる。しかも、これらはいずれも管理の容易な、半恒久的なバンダ・チャクラの耕地で栽培されており、共同労働を通じて、より一層の労働投下量の最小化がはかられているものとみられる。このような作物栽培、耕地の造成・管理、食料加工などにみられる各種の農耕技術の開発が標高差2,000メートルにも及ぶ大きな高度差利用を可能にしているものとかんがえられる。

4. 家畜飼養と交換

1) マルカパタの家畜

マルカパタの農業が家畜の飼養と密接な関係をもっていることは、これまでの記述からもうかがえるだろう。すなわち、パパ・プーナやパパ・ルキなどのバレイショ栽

培では、必ず家畜の糞が肥料としてつかわれ、休閒地には家畜を放牧して地力の回復をはかっているものとみられる。また、トウモロコシ耕地でも刈り跡放牧がおこなわれている可能性がある。さらに、これらの収穫物の運搬には必ずといっていいほど駄獣がつかわれ、とくに傾斜の急なアンデネスでの収穫物の輸送にはリヤマが欠かせないものとなっているのである。

さて、マルカパタでみられる家畜は、リヤマ、アルパカ、ヒツジ、ウシ、ウマ、ブタ、ニワトリ、クイなどである。アルパカ、ヒツジは主として採毛用で、リヤマとウマは運搬用、ウシ、ブタ、ニワトリ、クイは食用である。リヤマ、アルパカ、ヒツジもしばしば食用とされるほか、リヤマの毛も織物につかわれる。また、リヤマ、アルパカ、ヒツジの糞は燃料、肥料に、牛の糞も燃料としてつかわれる。クイ (*Cavia porcellus*) はモルモットの一種で、アンデスでは古くから食用として飼われており、マルカパタではその肉は祭や儀礼に不可欠なものとなっている。

これらの家畜も、栽培植物と同じように、高度によって、その分布にちがいがみられる。とくにアルパカは草地帯のなかでも湿原のようなところに、その分布は限定される。これはアルパカの足がよわいから、あるいは湿原のようなところにはえる牧草しか食べないからだとされる。したがって、マルカパタでアルパカが放牧されるのはおおよそ4,000メートル以上の高地の谷間の部分である。

いっぽう、リヤマは駄獣として、きわめて広い範囲を移動する。牧草さえあればどこでも移動可能といわれ、低地部へは海拔2,000メートルくらいまで、高地部では海拔5,000メートルくらいまでの範囲を移動している。また、ウマがつかえないような急な斜面や細い崖道も、一頭につき20~40キログラムの荷を積んで移動する。したがって、その放牧される高度域もひろく、一般に海拔3,600メートルくらいから4,500メートルあたりの草原やバレイシヨ耕地の休閒地である。ヒツジは、リヤマやアルパカとくらべると寒さに対して弱いといわれるように [WEBSTER 1973: 121], その放牧の中心となるゾーンは海拔3,600メートルあたりから4,000メートルくらいのやはりバレイシヨ耕地の休閒地などである。

これらの家畜の世帯ごとの所有頭数は、ミスティについては、すでに表3に示したとおりである。ミスティの所有する家畜のうちで、もっとも所有頭数の多いのはウシで、50戸中、27戸が計334頭所有していた。このウシは、もっぱら肉用で、しかもマルカパタで消費されるより、クスコなどの都市部に売るためのものである。ウマも、半数あまりの世帯が平均2頭以上有している。それに対して、リヤマ、アルパカはわずかに総計53頭で、とくにリヤマは、全村で一家族が2頭所有しているだけである。

このように、ミスティが、リヤマ、アルパカにくらべて、ウシやウマを多く所有しているのは、ひとつは家畜管理上の問題があるからである。すなわち、プエブロ・マルカパタ周辺部で放し飼いにできるウシやウマとは異なり、主としてプーナやリティ・クチュの高地部で放牧の必要があるリヤマやアルパカの家畜管理は海拔3,100メートルのプエブロ・マルカパタに居住するミスティにとってきわめて困難な作業となっているからである¹¹⁾。

それでは、ミスティが所有するリヤマやアルパカの管理ははたしてどのようになっているのであろうか。じつは、これらの家畜管理はミスティ自身はおこなわず、高地部に住むミスティの擬制親族や知人に委託されるのである。たとえば、表3中の世帯番号37の世帯はアルパカを20頭、ウシを4頭、ヒツジを12頭所有しているが、この家族が管理するのはウシだけである。20頭のアルパカのうち、12頭はカチカチに住む擬制親族が、8頭はチュンピの知人が、また12頭のヒツジはすべてトゥンコスに住む擬制親族が管理している。これらの集落が、いずれもプーナ・ゾーンに位置していることはいままでのない。これらの管理に対する反対給付として、ミスティはインディオにしばしば塩や砂糖をおくるほか、家畜儀礼の際には儀礼に不可欠なココヤ酒などを提供する。また、これらのインディオがプエブロ・マルカパタを訪れた時は、家畜の管理を依頼しているミスティは彼らに食事や宿を提供することになる。

2) 牧畜と交換

マルカパタにおける家畜飼養でもっとも重要なものは、リヤマとアルパカを中心とする高地での牧畜である。しかし、それは今回の調査ではごく表面的な観察にとどまったため、これらの家畜管理などの技術的な問題については今後の調査の機会を待って、あらためて報告することにした。ここでは、農業と牧畜および農民と牧民の関係について知るために、交換という問題に焦点をあててみてゆくことにしたい。

というのは、マルカパタではコムニダ・レベルでみると4つのコムニダがいずれも農耕および牧畜をおこなっており、その村落共同体的な性格をかんがえるとき、各コムニダは農牧複合社会であるといえる。しかし、これらのコムニダのなかには、牧畜

11) ミスティがリヤマをほとんどもたず、ウマを多く所有しているのは、彼らが馱獣としてはもっぱらウマを利用していることを示すものである。この理由については、インディオとミスティの社会的関係もかんがえる必要がありそうである。つまり、リヤマが馱獣としてだけでなく、その毛や肉が利用できるにもかかわらず、運搬用としての役割しかもたないウマをミスティが利用するのは、単に家畜管理や経済的な問題にとどまらず、それがミスティのprestigeを示すという機能をもっていると解されるのである。さきに述べたデスリンデがインディオは徒歩で、ミスティは馬に乗っておこなわれていたということも、これを示すものであろう。また、ミスティの耕地は、ウマだけで収穫物の輸送が十分可能な傾斜のゆるい、立地条件の良いところであるということも示しているようである。

専業や農業専業とみられる村があり、このような村では食糧にかぎってみても、その一部しか自給できないわけで、不足しているものについては主として交換という手段をとおして、入手されるのである。

コムニダごとにみてゆくと、マルカパタ・コヤナとプイカでは、集落レベルでみた場合、いずれもトウモロコシとバレイショを栽培し、牧畜もおこなっている。インディオについての世帯ごとの家畜所有頭数についての具体的なデータは、今回の調査ではほとんど得られなかった。しかし、さきにマルカパタ・コヤナのトウモロコシのバンダ・チャクラに海拔4,300メートルの高地に位置するマルカラニ村に住む家族のサラ・チュクヤがみられたが、この家族はマルカラニ周辺で18頭のアルパカ、6頭のリヤマ、15頭のヒツジを飼っている。もちろん、彼らはバレイショも栽培しており、けっきょく、この家族はトウモロコシとバレイショを栽培し、リヤマやアルパカなどの放牧もおこなって生活しているのである。この例にみられるように、マルカパタ・コヤナとプイカのコムニダでは、基本的に世帯レベルで、農業と牧畜をおこない、すくなくとも食糧にかんしてはほぼ完全な自給自足体制がとられているとみられる。

サワンカイとコヤスーヨのコムニダには、牧畜専業および牧畜を中心に行っている集落がみられる。サワンカイのコムニダでは、海拔4,300メートルにちかい高地に位置するワラコニは、マルカパタで唯一の牧畜専業の村といわれ、その村人もとくに牧民、パストーレス (pastores) とよばれる。ワラコニは戸数40戸程度の村で、各世帯のリヤマ、アルパカ保有数は平均200~300頭であるが耕地はまったくもたない。また、コヤスーヨのコムニダでも、海拔3,900メートルに位置するインカカンチャの村人はやはり平均100~200頭のリヤマ、アルパカを保有しているが、トウモロコシ耕地はほとんどもたず、バレイショはパパ・ルキとパパ・プーナだけ栽培している (写真24)。

したがって、これらの牧畜専業ないし牧畜中心の村は何らかの手段で農産物入手する必要があるが、まずはじめに、牧畜を専業とするワラコニ村についてみてみよう。ワラコニの農産物の入手方法は、購入と交換である。購入先はマルカパタではなく、主としてオコンガテである。ワラコニからエブロ・マルカパタまでは普通3日の行程であるが途中サヤパタ (Sallapata),



写真24 牧畜とバレイショ栽培のみをおこなっている村、インカカンチャ (海拔3,900メートル)

チキスなどの村に泊り、プエブロ・マルカパタにやってくる。そして、オビスパタからトラックを利用して、オコンガテにむかう。この間、リャマはプエブロ・マルカパタから1～2時間の距離にあるチキスの知人に託してゆく。オコンガテで購入するのは、チューニョ、モラヤ、トウモロコシ、ソラマメ、小麦、キヌアなどである。これらはプエブロ・マルカパタにもちかえた後、チキスからリャマをつれてきて、それに積んでかえる。

いっぽう、交換は、トウモロコシやバレイシヨの収穫期の5月から6月頃、マルカパタ各地に来ておこなう。ワラコニからはチーズ、肉、獣毛などを持参し、これをトウモロコシ、チューニョ、バレイシヨなどと交換するのである。さきに、コムニダの領域が、そこに成員権をもつインディオの生活領域としてつよく意識されていることを指摘したが、ワラコニのpastelesの場合、その交換範囲は所属するコムニダに限定されない。このような特異な行動様式は、ワラコニの住民にかぎらない。というのは、マルカパタには、プーノ県のカラバヤ (Carabaya) 郡のマクスニ (Macusani) やメルガル (Melgar) 郡のニュニョア (Ñuñoa) などの、マルカパタとは異なる地域社会からも、やはり牧民が交換にやってくるのである。

つぎに、インカカンチャについてみよう。その主たる交換先は、海拔約3,500メートルに位置するティルパ (Tilpa) である。この村は、インカカンチャがコヤスーヨのコムニダの高地部のみを利用しているのに対し、主として低地部を利用し、そこでトウモロコシとバレイシヨを栽培している。したがって、インカカンチャのチューニョ、モラヤ、肥料 (リャマ、アルパカ、ヒツジなどの糞) とティルパのトウモロコシ、バレイシヨ、ラカチャなどが交換される。

ここで注目すべきことは、これらの物々交換の比率は市場経済における価格とは関係がなく、慣習的に定められたものであることである。さきに、ワラコニの例でみたように、売って得た金で必要なものを買うのはまったく市場経済の上ののった方法であり、その点で物々交換とは大きなちがいがみられる。インカカンチャの場合、トウモロコシとバレイシヨは等量で、1リーブラのコカは1アローバ (25リーブラ) のバレイシヨと交換される。また、屠殺した一頭のアルパカは2袋のバレイシヨと、一頭のヒツジは一袋のバレイシヨと交換されることがきまっているのである。もしこれをクスコなどの町の市場で売れば、ヒツジは2,000ソーレス、バレイシヨはせいぜい1,000ソーレスであるといわれる。したがって、市場経済の価格の上では不均衡な交換をおこなっていることになる。

このような例はマルカパタにかぎらず、ペルー北高地のウチュクマルカ [Brush

1977: 250] やチャウピワランガ [FONSECA 1972: 330] などでも報告されている。たとえば、チャウピワランガの場合、家畜飼育に専念する村人とその下方で農業中心におこなっている人のあいだで物々交換がみられる。そして、交換の相手やレートはすでにながい伝統としてきまっている。彼らは宿舎と食事を提供しあう親密な間柄として代々つづいており、その関係はヤワシナクイ (yawasinacuy) とよばれているのである。

このような不均衡な交換をおこなう理由はヤワシナクイをはじめ、物々交換をする間柄がたんに物と物を交換するにとどまらず、さまざまな相互扶助を保証する関係になっているからであるとされる [大貫 1978a: 726]。マルカパタでも、さきに述べたミスティとインディオのあいだでこれに類似した関係がみとめられたが、このほかにもパストレスと農業中心の世帯のあいだに興味ぶかい交換がみられる。

それはアイニにみられたような一種の労働と物との交換である。牧民や家畜を多く所有するものが収穫期にやってきて、駄獣をつかって収穫物の輸送を手伝う。それに対し、収穫物の一部を提供するという関係がみられる。この場合も、馬10頭で輸送したときは、つねにコストル (costal: 輸送用の袋) 半分の収穫物が与えられる。また、リヤマの場合は10頭につき、リヤマ用のコストル1袋分が与えられるのである¹²⁾。

以上みてきたようにマルカパタの場合も牧民および牧畜中心の村人と農業を専業にしている村人の間には何らかの相互扶助を保証する関係があるようにおもわれる。この点で、さきにワラコニの牧民が購入のためにプエブロ・マルカパタに来るときは必ずチキスの村に宿泊するという事実は興味ぶかい。チキスは、マルカパタの集落のほとんどが自給自足にとどまっているのに対し、交換のために多くのトゥモロコシやバレイショを栽培している唯一の村といわれる。つまり、コムニダ単位での自給自足体制がつよくとられているマルカパタでは、おなじサワンカイのコムニダに属しているこれら2つの村が、それぞれ牧畜と農業に専業化ないしは分業化している可能性がかんがえられるからである。

V. 中央アンデス南部高地の環境利用—むすびにかえて

本稿の目的は、ペルー南部高地の一地域社会の環境利用の実態を、主として高度差利用の面からあきらかにすることにあつた。しかし、調査期間が約半年と環境利用を

12) バレイショの場合、馬用のコストルには60~80キログラム、リヤマ用では約40キログラムはいるとされる。

あきらかにするには短く、とくに収穫や食物加工、ならびにさまざまな交換がおこなわれる4月から7月にかけての期間が未調査である。したがって、本稿も中間報告的意図をもって書かれたものであるが、本稿をとじるにあたって、これまで述べてきたことを整理し、将来への展望もふくめて、いくつかの問題を記しておきたい。

表7はマルカパタの環境利用にかんしてこれまで述べてきたことを簡単にまとめたものである。マルカパタではこの表に示されるように、4つのコミュニティがいずれも、すくなくとも2,000メートルあまりの高度差利用をおこない、その領域の高地部で牧畜、中間地帯でバレイショをはじめとするイモ類の栽培、低地部でトウモロコシ栽培をおこなっている。そして、マルカパタ・コヤナとプイカのコミュニティでは基本的に世帯ないしは集落レベルで自給自足につとめている。それに対し、サワンカイやコヤスーヨでは、互酬的な物と物の交換、労働と物の交換などを通じて、コミュニティ・レベル

表7 マルカパタの環境利用

海拔	環境区分	生業	環境利用			
			マルカパタ コヤナ	プイカ	サワンカイ	コヤスーヨ
4200m	リクテユ	牧畜 (リヤマ, アルパ) (カ)	↑	↑	↑ ワラコニ	↑ インカカンチャ
3600m	プーナ	牧畜 (リヤマ, アルパ) (カ) 農業 (バレイショ, チ) (ユーニョ加工)	↑	↑	↑ 交換 チ キ ス	↑ 交換 テイルパ
3100m	ヤクタ	農業 (バレイショ, オ) (カ) 牧畜 (羊, 牛)	↑	↑	↑	↑
2600m		農業 (トウモロコシ, ソラマメ, ラカ) チャ	↑	↑	↑	↑
2000m	ユ ン カ	農業 (トウモロコシ, トウガラシ) 果樹 材木	↓	↓	↓	↓

で自給性を確保しているものとみられる。

さて、このようなマルカパタの環境利用の特徴をあきらかにするために、これまでに報告されている環境利用の類型と比較してみることにしよう。Brush は、さきに述べたようにアンデス高地の環境利用に (1) 圧縮型 (Compressed type), (2) 列島型 (Archipelago type), (3) 拡散型 (Extended type) の3つのタイプを設定した [BRUSH 1977: 10-16]。これらの類型の特色は大貫によって簡潔にまとめられているため [大貫 1978a: 720-721], それによって、以下に紹介することにした。第1の圧縮型は、土地の傾斜が急で、自然区分帯が連続的に分布するところでみられるタイプである。ウチュクマルカとケーロの環境利用のタイプがこの圧縮型であるとされ、そこでは自然区分帯の端から端までが徒歩で2~3日の距離である。したがって、村人はつねに上下に動きながら、高度差利用をおこない、生産活動に従事している。

第2の列島型は、Murra [1968, 1972] が民族史的な資料からあきらかにしたインカ時代から16世紀にかけてのルパカ族やチュパチュ族にみられたタイプである。それは、たとえばルパカ族でいうと、ティティカカ湖畔に主居住地をもちながら、太平洋岸にもトウモロコシ耕地をもつというように、利用する土地が遠くはなればなれになっていて、それを利用するためには本村をある程度留守にすることが必要になってくるものである。

第3の拡散型は、クスコ県のビルカノタ (Vilcanota) 谷のような広い谷間で、点在する集落のあいだで分業をおこない、複雑な交換の網を通して、産物が谷間全体にゆきわたるものである。大貫は、これらに專業型 (Specialized type) の追加を提唱したのである [大貫 1978a: 729]。それは、異なるエスニック・グループが、それぞれ異なる環境を、專業的に開発し、産物を交換しあうタイプである。拡散型においても、異なる環境の産物を交換することはみられるが、それはひとつの谷を占める同一エスニック・グループ間で成立するものであり、その点で專業型とはちがうとされる。

いっぽう、Webster は中央アンデス南部高地の牧畜の側からみた環境開発の類型化を試み、それには“セーハ”型と“プーナ”型とでもよぶべき、2つのタイプがみとめられるという [WEBSTER 1973: 128-131]。すなわち、南部高地における牧畜のパターンは、放牧地がアンデス東斜面の“セーハ” (cordillera flank) に位置しているか、“プーナ”の高原台地 (highland plateau) に位置しているか、という生態的な条件で決定されるという。

“セーハ”型は、ケーロにみられるようなアンデス東斜面の高度差を利用して、牧畜とトウモロコシやバレイショなどの作物栽培をともにおこなうタイプである。“プ

ーナ”型はプーナ県のパラティア (Paratia) のような牧畜専門の村やクスコ県のアルカヴィトリア (Alcavitoria) のような牧畜とバレイショ栽培をおこなっている村にみられるような“プーナ”の高原台地を生産活動の場としているタイプである [FLORES OCHOA 1968; CUSTRED 1977]。

さて、こうしてみると Brush は環境利用の形態に着目し、Webster はその環境に着目して、類型化しているわけで、Webster のいう“セーハ”型は Brush の圧縮型であり、“プーナ”型は専門型ないしは拡散型になるであろう。それでは、マルカパタにみられた環境利用の形態ははたしてこれらのタイプのどれにあたるであろうか。

マルカパタ・コヤナやプイカのコムニダでは基本的に世帯ごとに主作物のトウモロコシとバレイショを栽培し、牧畜をおこなって、自給自足しているとみられることから圧縮型とみてよいであろう。コヤスーヨやサワンカイのコムニダの一部では集落間分業の傾向がみられ、そのあいだで異なる環境の産物を交換しあっていることから拡散型とみることができそうであるが、本来は圧縮型が環境利用の基本であったのではないかと推察される。

環境利用の類型は、それぞれがその土地の自然的文化的条件や歴史的条件によって作り出されており、ある類型から他の類型へと変化することもありうる [大貫 1978a: 729]。コヤスーヨやサワンカイのコムニダでも圧縮型から拡散型へと変化してゆく過程にあるとかがえられるのである。マルカパタでは、これまでくりかえし述べてきたように、4つのコムニダがそれぞれの領域内の比較的せまい範囲内に多様な環境を有しており、この高度差を利用することによって、世帯レベルで農業と牧畜をとにもおこなった自給自足が可能である。しかし、それはある程度の規模をこすと世帯レベルではおこない得なくなり、農業専門や牧畜専門などのように環境の一部を利用するタイプへと移行するのではないか。とくに、マルカパタでは、4つのコムニダはいずれも村落共同体的な性格をつよくもっているため、集落間の分業化もきわめて容易におこなうことができるものと推察されるのである。つまり、マルカパタでは世帯レベルで自給自足体制が完結する環境利用の形態がおそらく発生的にはもっとも基本的なものであるとかがえられる。そして、世帯レベルで自給自足体制が確保できなくなったとき、それは集落あるいはコムニダのレベルで自給自足体制をとろうとするのであろう。

こうして、マルカパタにおける環境利用の基本形態が圧縮型であるとかんがえると、すくなくとも中央アンデス南部高地では、これまでみてきた環境利用の諸類型はあたえられた生態的条件によって、ある程度決定されているようにおもわれる。というの

は、中央アンデス南部高地に地域をかざれば、“セーハ”型は圧縮型であり、“プーナ”型は專業型ないしは拡散型であることを指摘したが、マルカパタもまさしく Webster のいう“セーハ”(cordillera flank) に位置していて、その環境利用の形態は圧縮型である。さらに、マルカパタでは、環境のうえでも、その利用形態のうえでも、唯一の例外となっているワラコニ村は“プーナ”(highland plateau) に位置していて拡散型とみられるのである。これに、アンデス西斜面を利用するルパカ族の列島型を加えると、中央アンデス南部高地の環境利用の形態は、アンデス西斜面は列島型、“プーナ”は專業型ないしは拡散型、アンデス東斜面は圧縮型ということになるのである。

はじめに述べたように、中央アンデスはコスタ(海岸砂漠地帯)、シエラ(山岳地域)、モンターニャ(熱帯低地)の3つのはっきりとした特徴をもつ地域にわけられる。しかも、その南部高地は、アンデスのなかでも、もっとも大きな高度と幅を有する部分となっており、またその高地部は東・西両山脈にかこまれた高原台地になっている。

したがって、中央アンデス南部高地は、その東斜面に住む農牧民にとっては、比較的せまい範囲内にもっとも多様な環境がみいだされるところであり、高原台地に住む者にとっては低地部への移動がきわめて困難なところとなっている。したがって、このような環境を利用するとすれば、アンデス東斜面、つまり Webster のいう“セーハ”では世帯レベルでも熱帯低地から寒冷高地までの高度差利用が可能であるのに対し、“プーナ”の高原台地ではこの高原のみを利用するタイプ、すなわちリャマやアルパカなどの牧畜と寒冷高地に適しているバレイショなどの作物栽培をおこなう環境利用が基本的形態になるとかんがえられるのである。

それでは、この高原台地に居住地をもちながらアンデス西斜面の海岸地帯の遠隔地に耕地をもつルパカ族の環境利用はどのように理解されるであろうか。筆者は、このような大規模な列島型の環境利用の類型は、これまでみてきた圧縮型や拡散型、專業型などとは性格を異にするものであるとかんがえる。というのは、ルパカ族は人口10万から15万という大きな民族であり、そのような民族レベルでの環境利用の形態とこれまでみてきたような世帯レベルないしは村落レベルのそれらとは同列に扱えないであろう。換言すれば、列島型の環境利用体系の形成は、中央アンデス高地における政治権力による社会・政治的統合とつよい関係をもっていたとかんがえられるのである。このような民族集団のみられない現在、アンデス西斜面ではまったく列島型の環境利用のタイプはなく、そこにみいだされるのは拡散型ないしは專業型とみなされるものばかりである [大貫 1978b: 1-17]。これは、とりもなおさず、列島型の環境利用が政治権力などの力によって維持されていたことを示すものではないか。

いずれにしても、従来の類型論のように、環境利用の諸類型を形態や生態的条件だけで理解することはむづかしいようにおもわれる。環境利用の形態が当該社会のあたえられた環境によって制約をうけるのは当然としても、その社会の構造、規模などのちがいにより、環境利用の形態もまたちがってくるとおもわれるからである。

謝 辞

本稿の基礎となった調査の実施にあたっては数多くの方がたのお世話になった。まず、この調査の機会をあたえていただいた本館共同研究班の皆さん、増田昭三教授、大貫良夫助教授（東京大学）、佐藤信行教授（広島大学）、友枝啓泰助教授、藤井龍彦助教授（国立民族学博物館）に謝意を表しておきたい。これらの皆さんからは、調査期間中はいうまでもなく、本稿をまとめるにあたって、貴重など助言、ご指導をいただいたことを付記しておきたい。

また José Antonio Gutiérrez 氏の家族をはじめとする プエブロ・マルカパタの皆さんには、面倒な調査に協力頂いた上、色々な面でお世話になった。César Vargas, 松林元一両先生には標本の同定でご協力いただいた。稲村哲也（東京大学大学院学生）、友村光秀（京都大学学生）両君には、地図の作成や植生調査などでお手伝いいただいた。記して、感謝の意を表しておきたい。

文 献

- BRUSH, Stephen B.
 1974 El Lugar del Hombre en el Ecosistema Andino. *Revista del Museo Nacional* 40: 277-99.
 1977 *Mountain, Field, and Family: The Economy and Human Ecology of an Andean Valley*. University of Pennsylvania Press.
- CUSTRED, Glynn
 1977 Peasant Kinship, Subsistence and Economics in a High Altitude Andean Environment. In Bolton and Mayers (eds.), *Andean Kinship and Marriage*, American Anthropological Association, pp. 117-135.
- シエサ・デ・レオン
 1979 (1553) 『インカ帝国史』（増田義郎訳）岩波書店。
- Donkin, R. A.
 1979 *Agricultural Terracing in the Aboriginal New World* (Viking Fund Publications in Anthropology No. 56). The University of Arizona Press.
- ELLENBERG, H.
 1979 Man's Influence on Tropical Mountain Ecosystems in South America. *Journal of Ecology* 67: 401-416.
- ESPINOZA GALARZA, M.
 1973 *Topónimos Quechuas del Perú*. Cosesa.
- FONSECA MARTEL, César
 1972 La Economía Vertical y la Economía de Mercado en las Comunidades Alteñas del Perú. In Iñigo Ortiz de Zúñiga, *Visita de la Provincia de León de Huánuco en 1562*, Tomo II, pp. 317-338. Universidad Nacional Hermillo Valdizán de Huánuco, Perú.
- FLORES OCHOA, Jorge A.
 1968 *Los Pastores de Paratía: una Introducción a su Estudio*. Ediciones Inkari.

- HAWKES, J. G.
1944 *Potato Collection Expedition in Mexico and South America II: Systematic Classification of the Collections*. Imp. Bureau Plant Breed. Gen., School of Agriculture.
- HEISER, C. B. and P. G. SMITH
1948 Observations on Another Species of Cultivated Pepper, *Capsicum pubescens* R. & P. *Proc. Amer. Soc. Hort. Sci.* 52: 331-335.
- HODGE, W. H.
1951 Three Native Tuber Foods of the High Andes. *Economic Botany* 5: 180-186.
- INSTITUTO NACIONAL DE PLANIFICACION
1969 *Atlas Histórico Geográfico y de Paisajes Peruanos*. Instituto Nacional de Planificación.
- MAYER, Enrique
1971 Un Carnero por un Saco de Papas: Aspectos del Trueque en la Zona de Chau-piwaranga, Pasco. *Revista del Museo Nacional* 37: 184-96.
- MURRA, John V.
1968 An Aymara Kingdom in 1567. *Ethnohistory* 15: 115-151.
1972 El Control Vertical de un Máximo de Pisos Ecológicos en la Economía de las Sociedades Andinas (Reprinted in Murra 1975). pp. 59-115.
1975 *Formaciones Económicas y Políticas del Mundo Andino*. Instituto de Estudios Peruanos.
- 三浦信行
1963 「南部ペルー・アンデスの村落構造 — Chinchero の政治・教会組織 —」『民族学研究』27(4): 1-20。
- 大貫良夫
1978a 「アンデス高地の環境利用—垂直統御をめぐる問題—」『国立民族学博物館研究報告』3(4): 709-733。
1978b 「ペルー南部民族学調査覚書」『リトルワールド年報』1: 1-17。
- ONERN (Oficina Nacional de Evaluación de Recursos Naturales)
1976 *Mapa Ecológico del Perú*. Oficina Nacional de Evaluación de Recursos Naturales.
- SAUER, C. O.
1950 Cultivated Plants of South and Central America. In J. H. Steward (ed.), *Handbook of South American Indians* 6. Smithsonian Institution, Bureau of American Ethnology, pp. 487-543.
- WEBSTER, Steven
1971 An Indigenous Quechua Community in Exploitation of Multiple Ecological Zones. *Revista del Museo Nacional* 37: 174-183.
1973 Native Pastoralism in the South Andes. *Ethnology* 12: 115-133.
- 山本紀夫
1976 「中央アンデスの凍結乾燥イモ、チューニョー加工法、材料およびその意義について—」『季刊人類学』7(2): 169-212。